

子どものよりよい育ちをともに考える

ベネッセの情報誌

# これからの幼児教育

保育者研修などに役立つ特集を  
集めた特別版です

特選号

子どものよりよい育ちをともに考える  
ベネッセの情報誌

## これからの幼児教育

### 特選号

2012年3月20日発行

発行人 新井健一

編集人 後藤憲子

発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所  
〒163-0411  
東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13F  
<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

©Benesse Corporation 2012

『これからの幼児教育』刊行によせて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、  
幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に  
役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査  
データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよ  
い子どもの育ちについてともに考えていきます。

お問い合わせ先

**0120-933-964**

通話料  
無料

受付時間 10:00～17:00(日曜・祝日は除く)

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。

※携帯電話・PHSからもご利用できます。

※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、**086-270-5037**へ  
おかけください(ただし通話料がかかります)。

園運営のポイントとなる  
**3つのテーマ**をお届けします

**I** 子どもが育つ  
保育の基本

**II** 保護者が育つ  
園の支援

**III** 保育者が育つ  
園づくり

※それぞれのテーマで、2つの記事を掲載しています

特選号は、ベネッセの情報誌「これからの幼児教育」の中で、園運営に欠かせない3つのテーマから厳選した特集をお届けします。保育者研修や保護者への発信に、ご活用ください。

<b>I</b>	<b>子どもが育つ保育の基本</b>	<b>P.1</b>
	園の遊びがもたらす「学びの芽生え」	P.2
	特別なニーズをもつ子に寄り添う保育	P.9
<b>II</b>	<b>保護者が育つ園の支援</b>	<b>P.16</b>
	保護者の成長を促す園の支援	P.17
	思いを伝える情報発信で保護者と「つながる」園をつくる	P.20
	<b>Q&amp;A 保護者との関係づくり こんなときはどうする？</b>	<b>P.24</b>
<b>III</b>	<b>保育者が育つ園づくり</b>	<b>P.26</b>
	保育者の資質を高める園内研修	P.27
	若手の保育者がのびのびと育つ 温かい園の風土づくり	P.35

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

## I

# 子どもが育つ 保育の基本

子どもは、やりたい気持ち（めあて）を持って主体的に遊びや活動に取り組む中で、さまざまな気づきや発見をします。その面白さが体験として積み重ねられることで、めあての質が高まります。

そして、この気づきや発見をともに喜んだり、新たな方向を示してくれる保育者がいると、意欲がいつそう高まります。これが、学びの芽生えにつながります。大切なのは、一人ひとりの興味・関心、発達の実情に即した指導・援助です。特別なニーズをもつ子の指導も含めて、一人ひとりの発達の特성에応じた指導が、子どもが育つ保育の基本です。

この章では、保育の基本的な取り組みのポイントを紹介します。

園の遊びがもたらす「学びの芽生え」 P.2

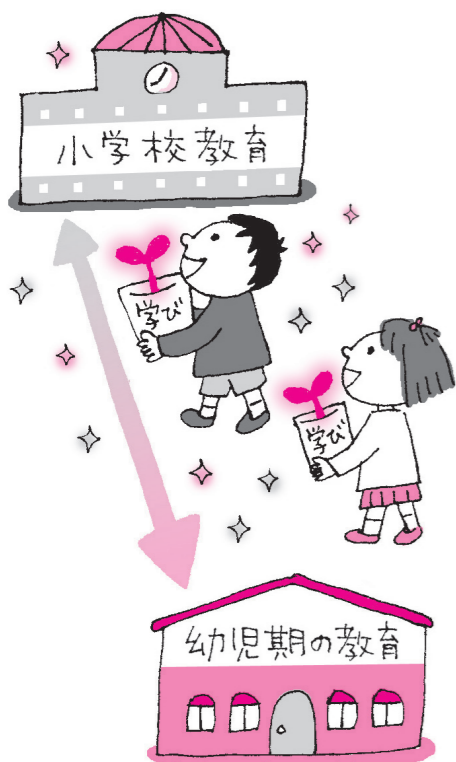
特別なニーズをもつ子に寄り添う保育 P.9

# 園の遊びがもたらす 幼児期の「学びの芽生え」

園での遊びは、小学校以降の学びにどのようにつながっているのでしょうか。この点を十分に理解することは、幼児期の教育と小学校教育の接続を進めていくうえで非常に大切です。ここでは、幼児期の「学び」について改めて考え、具体的な援助のあり方を探っていきます。

幼児期の教育にかかわる幼稚園・保育所・認定こども園の先生がたへ

## 「学びの芽生え」から幼小接続<sup>\*1</sup>を考える



### 幼小の「学び」の接続を意識した援助が求められている

「幼小接続」の取り組みが今、全国的に広がっています。いわゆる小1プロブレムが社会的な課題となる中で、幼児期の教育と小学校教育がこれまで以上に連携し、園でははぐくんだ力を土台に、小学校での生活を積み上げていくことが求められています。

幼小接続を効果的に進めるには、小学校入学前の「準備」にとどまることなく、園から小学校への学びのつながりを踏まえた援助を保育者が行うことが重要です。そこで、幼小接続に必要な要素の中でも、特に「学び」を中心に特集を構成しました。

### 幼小接続のキーワード「学びの芽生え」

キーワードになるのが、幼児期にははぐくんでおきたい「学びの芽生え」です。これは、文部科学省「幼小接続会議<sup>\*2</sup>」から出された報告書(2010年11月)で提唱されている言葉です。本誌では同会議の座長・無藤隆先生、副座長・秋田喜代美先生に分かりやすく解説していただいています。

園で、はぐくんでおきたい力や小学校入学に向けた援助を見つめ直すヒントにいただければと思います。

### こんな園長先生におすすめ

- ◎保護者に幼児期の遊びの意義を伝えるのが難しいと感じている
- ◎幼小接続・連携を充実させたいと思っている
- ◎遊びの中から、どのような学びが得られるのかを知りたい
- ◎園全体として子どもの援助の方針を統一していきたい

\*1 「幼小接続」とは、幼稚園と小学校の接続のみではなく、幼稚園・保育所・認定こども園が行う幼児期の教育と小学校教育の接続を表しています。  
\*2 正式名称は、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」。記事の中では、「幼小接続会議」と表記しています。

### インタビュー 1

## 「学びの芽生え」が生涯の学びの出発点になる

幼児期の遊びの中での「学びの芽生え」が、今注目されています。学びの芽生えとは具体的にどのような状態を表し、なぜ子どもにとって重要なのでしょうか。文部科学省「幼小接続会議」の座長を務めた白梅学園大学の無藤隆先生に解説していただきました。



### 幼児教育は小学校の「準備」ではなく「土台」

幼稚園、保育所、認定こども園における幼児教育・保育はどうあるべきか、そしてそれを小学校にどのようにつなげるべきかということが、文部科学省「幼小接続会議」の重要な論点でした。近年、幼小接続が注目されている直接的な背景には、いわゆる小1プロブレムがあるのですが、この問題を解決するには、単に幼稚園・保育所などが「準備教育」をすればよいわけではありません。幼児教育を、小学校以降の教育の「土台」ととらえ、一人ひとりの子どもに対して長期的な視野をもつ

た援助をする必要があります。

全国で幼小接続の実践も活発になってきていますが、必ずしも期待通りの成果はあがっていないようです。その要因には3つが考えられますが、これらはいずれも幼児教育の本質が十分に理解されていないことに根ざしています。

1つは、先ほど述べたように、幼児教育を小学校の「準備教育」と考え、読み書きや計算、長時間椅子に座る練習などに終始してしまうケースです。確かに、そのような指導が必要な面もありますが、それは幼児教育の本質ではありません。

2つめは、逆に「幼児期は遊んでいればよい」という発想です。遊び



白梅学園大学子ども学部教授  
**無藤 隆**

むとう・たかし  
白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。「幼小接続会議」座長のほか、文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に「保育の学校(全3巻)」「フレーベル館」など。

が大切なのは、その中に情緒の育ちを含めた「学び」があるからです。保育者がその点を理解せず、単に子どもが遊んでいるだけでは、なかなか学びは生じません。

3つめは、幼児教育を基盤として、その上に小学校の学びを積み上げていくという意識を、小学校側が十分にもっていないケースです。子どもは遊びの中で、興味をもったり、

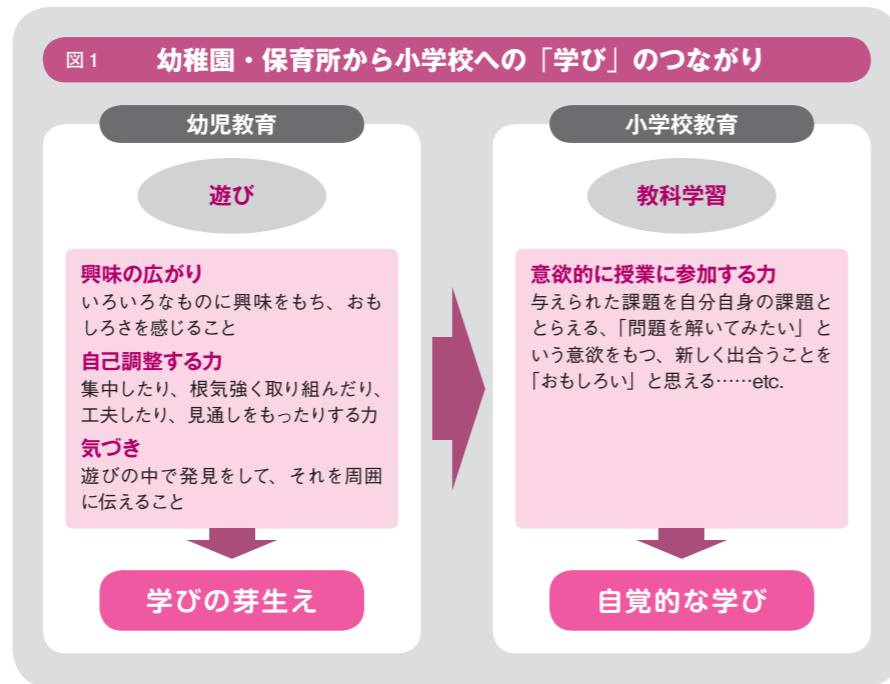
気づいたり、考えたりする力を伸ばしていますが、それを小学校側が理解せず、ゼロからのスタートという意識をもっていることもあるようです。

幼小接続が目指すのは、幼児期の教育と小学校教育が相互理解を深めながら、お互いの良質な部分を取り入れ合うことです。それによって子どもは園における学びを土台として、小学校以降の学びをスムーズに発展させることができます。

### 「学びの芽生え」があって「自覚的な学び」が生まれる

幼小接続を考えるうえで重要なのが、子どもの学びがどのように発展していくかを理解することです。幼小の双方の関係者が「幼児期の『学びの芽生え』から、小学校低学年の『自覚的な学び』へ」というつながりを十分に踏まえた援助や指導を心がける必要があります。

具体的に説明しましょう。「学びの芽生え」とは、遊びの中で、楽しみ、試し、工夫し、見通しをもつと



いうふうに、子ども自身が遊びを発展させていくことです（具体例は次ページ図2を参照）。幼稚園教育要領で言えば、「体験の関連性」（第3章を参照）を指します。例えば、葉っぱをすりつぶしている子どもは、初めは保育者のまねをしますが、楽しくなると、木の実で試したり、異なる色水を混ぜる工夫をしたりしながら、次第に「こんな色を作りたい」「何かを染めてみたい」といった目的や計画をもって遊ぶようになります。これが、学びの芽生えです。

学びの芽生えは、小学校低学年で育つ「自覚的な学び」の土台になります。自覚的な学びとは、先生が与える課題に興味をもち、自分の課題として受けとめ、「解いてみたい」という意欲をもって学ぶことです。単におとなしく椅子に座っているのではなく、意欲的に授業に参加する力と言うこともできるでしょう。

### 「学びの芽生え」は遊びの中でこそ経験できる

学びの芽生えがどのように自覚的な学びへとつながるかは、学びの芽生えをもたらす3つのポイントを説明することで理解していただけるでしょう。それは、「興味の広がり」「自己調整する力」「気づき」です。

「興味の広がり」は、遊びの中でいろいろなものに興味をもち、おもしろさを感じることです。これが十分に育った子どもは、小学校に入っ



てから、算数の問題を解くのも、生活科で町を探検するのも、おもしろいと感じるようになります。

「自己調整する力」とは、集中したり、根気強く取り組んだり、工夫したり、ときには我慢して先を見通しながら自分をコントロールし、今

の遊びをつくっていく力です。この力は、長期間の活動をコツコツと続ける中で育ちます。特に、5歳~7歳の時期に育てることが重要で、十分に育たないと、小1プロブレムが起りやすくなると考えられます。「気づき」は、思考力の芽生えと

密接に関連します。例えば実をすりつぶしたら、「こんな色になった!」という発見が気づきです。気づきがあると、それを言葉にして友だちや先生に伝えたいくなります。気づきやコミュニケーションを繰り返す中で、思考は深まるのです。

ここで強調したいのが、学びの芽生えは遊びの中でしか経験できないということです。ですから、小学校への準備教育だけでも、逆に単に遊ばせるだけでも、幼児期の教育としては不十分です。保育者に最も求められるのは、学びの芽生えを促すことを強く意識しながら遊びの援助をすることなのです。

小学校での学びは、中学校や高校、大学、そしてその後の人生へとつながっていきます。その出発点になるのが幼児教育であることを認識し、学びの芽生えを育てる援助を実践していただければと思います。

### 現場のみなさんへ

◎幼児教育の潜在的な価値は、まだまだ世の中に十分には伝わっていないと感じます。学びの芽生えが注目されている今は、幼児教育の本当の意味を伝えるチャンスといえます。これまでに幼児教育が取り組んできたよい部分を、さらによくするという気持ちで、自信をもって子どもに接してください。

### ここから始めてみませんか? 「学びの芽生え」を促す援助

#### ◎遊びを發展させましょう

同じ遊びを繰り返すのではなく、今日、明日、来週……と、少しずつ複雑な遊びへと発展させることが大切です。毎日の保育記録を振り返り、翌日以降の計画を練るとよいでしょう。

#### ◎協同的な活動を入れましょう

5歳になったころから、特にグループで行う協同的な活動を重視してください。1日では終わらない連続的な活動の方が協同的な活動を通した学びは深まりやすくなります。

#### ◎言葉による伝え合いを取り入れましょう

帰りの時間に何をして遊んだかを発表し合うなど、形式はさまざまで構いませんから、実物提示と一緒に言葉による伝え合いの活動を取り入れましょう。

## インタビュー 2

# 保育者の「遊びの見通し」が「学びの芽生え」に結びつく

学びの芽生えを促す援助に決まったかたちはありません。必要なのは一人ひとりの子どもの状態に合わせた柔軟なサポートです。

援助を行ううえで、園全体で共有したい考え方や具体的な実践方法について、「幼小接続会議」の副座長を務めた東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。



### 学びに向かうきっかけは大人も子どもも同じ

幼児期の子どもは、どのようなきっかけによって「学び」に向かうのでしょうか。私は、子どもも大人も大きな違いはないと考えています。例えば、大人が、毎日同じ料理をルーティンワークとして作るだけなら、何も考える必要はありません。しかし、ふだんとは食材を変えてみたり、お客さんをもてなしてみたりといったきっかけで、工夫しようという気持ちが生まれます。子どもも同じで、遊びの中から生まれたきっかけを育てていくことによって、初めて学びが生まれるのです。

しかし、大人にも、常に学び続けようとする姿勢をもつ人もたない人がいます。これは、幼児期に十分な「学びの芽生え」を経験し、それが小学校以降の学びへとつながったかどうかが大きく関係するものと思われま

### 生涯学習の基盤として世界的に注目される幼児教育

◎1990年ごろから、「保育の質の効果」、そして幼稚園から高校までの「教育課程の一貫性」について、アメリカやイギリスなどを中心に議論が盛んになりました。背景には、幼児期の学びがその後の人生に多大な影響を及ぼすという考えが広く知られるようになったことなどがあります。幼いころから「わからないことを調べたい」という気持ちが育っていれば、例えば、大人になったときに自分から健康に関する情報を調べて健康管理に生かすなど、さまざまな場面で新しいものを取り入れて自分の生活をより豊かに、より幸せにすることができます。そのように、生活者として学び続ける生涯学習の基盤として幼児教育が重視されているのです。



東京大学大学院教育学研究科教授  
**秋田喜代美**

あきた・きよみ  
東京大学大学院教育学研究科教授。日本保育学会会長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、「保育の心もち」「保育のおもむき」（いずれもひかりのくに）など。

### 図1 幼児教育と小学校教育の違い

#### 幼児教育

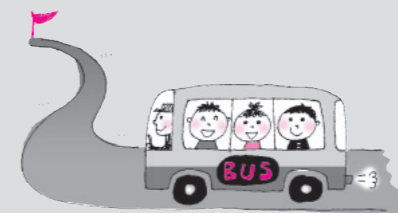
一人ひとりのペースに合わせて散歩するイメージ。目的地に到着することより、途中でさまざまなものに関心を抱くことを重視。



◎個々の子どもの個性を重視し、自由な遊びの中で「学びの芽生え」を促すことを目指す。

#### 小学校教育

全員が同じバスに乗って、決められた目的地に時間通りに到着するイメージ。



◎最低限必要な知識・技術などを身につけるために、すべての子どもが共通の目標に向かって学ぶ。

幼児期の学びの芽生えは、幼児教育と小学校教育の違いをイメージするととらえやすくなるでしょう。小学校教育は、すべての子どもが電車やバスに乗って決められた目的地に時間通りに到着するようなイメージです。窓から景色を眺めるなど、多少の行動の自由はありますが、基本的には集団で同じ方向に進んでいきます。

一方、幼児教育は、一人ひとりのペースに合わせた散歩です。「自分のペースで歩いた」という自信を付けたり、目的地への到着よりもその過程でさまざまなものに興味をもつことを大切にします。

ただし、散歩にも地図は必要です。どのような方向に育ってほしいかという地図を保育者がもち、子どものペースに合わせて導いていく必要があります。その意味では、保育者には、子どもの育ちを俯瞰的に見る「タカ目」、そして子どもに寄り添う「アリの目」の両方が必要

と言えるでしょう。

子どもが幼小の違いをスムーズに乗り越えていくには、保育者が小学校教育へのつながりを意識する必要もあります。そのためには、小学校学習指導要領を読んだり、小学校低学年の授業を見たりすることも大切になります。

### 学びを促す援助の基本は「関心」のありかを知ること

では、学びの芽生えを促すために、保育者はどのような援助をすればよいのでしょうか。これは、どのようなときに学びが起きるのかを理解することが基本になります。

そもそもこの時期の子どもは、小学校以降のように「○○をしなさい」といった保育者の言語的指導で学ぶのでしょうか。確かに、そういう場面もありますが、それでは学びの芽生えを促すことはできません。保育者の援助を通じて「もの・ひと・

こと」に深くかかわる中で、子どもは「自ら」学ぶのです。

例えば、昆虫を見つけたとき、保育者が「図鑑で調べよう」と促すのは、よく見られる援助です。子どもが昆虫の名前を知りたがっているのなら、それでよいと思います。しかし、「石の下にたくさん虫がいる」「同じ種類なのに大きさが違う」といった点に関心があるのなら、それらを探求していくための援助によって、子どもは昆虫とより深くかわり、学びの芽生えが促されます。つまり、子どもの関心のありかを捉えることが、学びの芽生えをうながす出発点になるのです。

ただ、学びのきっかけは保育者が意図した通りに起こるとは限りません。静電気で体にビニールがつくことに気づいた子どもがいるとしましょう。こうした瞬間は、学びの芽生えを促すチャンスです。保育者がそれを見逃さずに一緒になって興味をもち、他の子どもに働きかけたり、別の素材で試すように促すことで、偶然のきっかけが学びにつながっていくのです。

### 安心できる環境の中で「広げる」「深める」

次に園における環境づくりの2つのポイントを説明しましょう。

1つめは、ふだんから大切にされているとは思いますが、学びの芽生えを促すうえで、一人ひとりの子どもが、保育者や仲間から「自分は認められている」という安心感を抱け

# 特別なニーズをもつ子に 寄り添う保育とは？

近年、発達障害がある子どもへの対応が、各園での大きなテーマのひとつになっています。保育者は発達障害をどのようにとらえ、子どもと向き合えばよいのでしょうか。おふたりの専門家のインタビューから考えます。

る環境は不可欠です。子どもは、不安があるうちは、決して学びに向かわないからです。

そして2つめは、活動を「広げる」「深める」という視点を園全体で共有することです。「広げる」は、ひとりの遊びを仲間との遊びにつなげたり、異なる環境や素材で試したりすること。そして「深める」は、保育者がつねに活動の見通しをもって、子どもとともに考えて次の一歩に展開させていくことです。

例えば、積み木遊びでより高く積み木たいという子どもの関心を支えるのは、「深める」援助です。こうした援助により、子どもは「土台が大きくなると不安定になる」などと学び、活動は深まっています。一方、積み木で作った建物を駅に見立て、ほかの子どもとともに電車ごっこをするように導くのは「広げる」援助と言えます。2つの援助ははっきりと分けられるわけではありませんが、保育者が違いを意識して場面に応じて援助を使い分けることで活動を展開させやすくなります。

そのために必要なのが、保育者が「遊びの見通し」をもつことです。これは、例えば、牛乳パックでイカダを作る活動で、「どれくらいの高さを作れるか」「イカダを使って、どんな遊びができるか」といった次の展開の見通しをもっておくことです。保育者が子どもの発達段階や遊び・生活経験などを踏まえて遊びの展開を見通し、複数の援助を想定しておくことで、活動の「広がり」や「深まり」がうながされます。

## 「学びの芽生え」を促す援助のポイント

- 1. 「周囲から認められている」という実感をもたせる**  
子どもは心に不安を抱えていると、学びに向きません。一人ひとりの子どもが保育者や仲間から「認められている」と実感できる環境を整えましょう。
- 2. 遊びを「広げる」「深める」という視点をもつ**  
子どもが遊びこめるように、ほかの子どもなどに「広げる」、1つの活動を「深める」という2つの視点をもち、場面に依りて援助に取り入れましょう。
- 3. 保育者が「遊びの見通し」をもつ**  
発達段階や遊び・生活経験などを踏まえ、「どのように展開させるとよいか」という遊びの見通しをもっておくことで、先を見据えた援助になり、子どもの学びをうながしやすくなります。

## 保育の場を共有した研修で 遊びを見通す力を養う

しかし、経験の浅い保育者にとって長期的な遊びの見通しをもつのは難しく、目の前の子どもを追うだけの援助になってしまいがちです。すると、気になったことを、あれもこれもと指示するような援助になり、子どもが創意工夫をするチャンスが失われてしまいます。

一方、ベテランの保育者は「今は無理でも、半年後には自然に友だちと一緒に協力するようになるだろう」といった長期的な見通しをもつため、「今、指導しなくてよいこと」が見極められます。これは、学びの芽生えを促すうえで、とても大切なことです。

ですから、どの保育者も遊びの見通しをもてるような園内の環境づくりが求められます。若手の保育者がベテランの実践を見学したり、前年度の記録を確認したりすることは、活動の内容や子どもの育ちへの理解につながるでしょう。記録や写真、ビデオなどをもとに活動の場を共有し、保育者同士が、子どもの学びや援助について話し合う研修

も、遊びの見通しを養ううえでは有意義だと思います。

学びの芽生えを促す援助は、いわゆる早期教育とは本質的に異なります。保育者のみなさんは、子どもの中にゆっくりと育つきめ細かな芽を見つけ、育てていくという視点を大切にしてください。

## 現場のみなさんへ

◎園のみなさんが多忙であることはよく理解していますが、忙しさのあまり心の余裕まで失うと、子どもに対する要求が多くなってしまいがちです。「学びの芽」は、じっくりと子どもを見つめたときに見えてくるものです。心にゆとりをもって朝から笑顔で子どもを受け止められるように、あまり無理はせず、どうか健康にも気をつけてください。個々の保育者らしさ、園らしさを大切にしながら、「学びの芽」をはぐんでいただきたいと思います。

※2011年春号掲載

## はじめに

# 「特別支援教育・障害児保育」を取り上げた背景

## 「気になる子への対応」に 高い関心が寄せられている

発達障害がある子どもをどのように支えるかは、多くの園で重要な課題になっています。本誌の読者アンケートからも「気になる子」が増えていると実感している園が多いことが明らかになるとともに、「発達障害があると思われる子どもの保護者への対応について知りたい」など、子どもや保護者にどう向き合うか、現場の保育者が模索していることがわかりました。さらに、08年度に改訂（定）された幼稚園教育要領<sup>※1</sup>や保育所保育指針<sup>※2</sup>でも、特別支援教育・障害児保育の重要性が指摘されています。

## 「特別なニーズをもつ子」という言葉に込めた思い

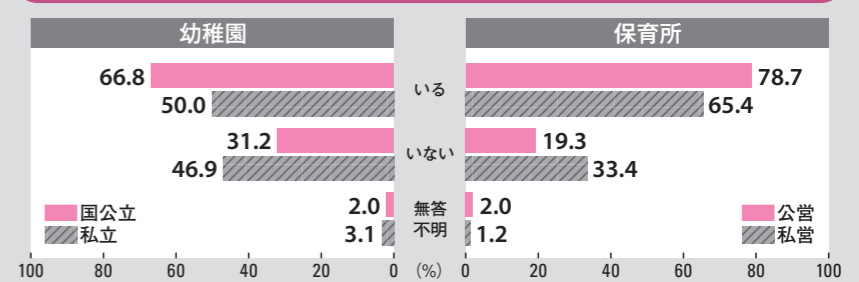
発達障害がある子どもへの支援は、よく「特別支援」「特別な配慮」といった言葉で表されますが、今回、記事では「特別なニーズ」とい

う言葉を使っています。これは、専門家や実践を重ねる保育者のかたがたとお話しする中で出合った言葉です。「支援」「配慮」という保育者からの言葉よりも、子どもの側に視点を置いた「ニーズ」という言葉で、このテーマに向き合うことで、発達障害がある子どもをより理解することができると考えました。

特別なニーズをもつ子どもが、豊かに育っていくために、保育者には何が求められているのか。これからも一緒に考えていきたいと思っています。



図1 特別に支援を要する園児・障害児



注) 幼稚園の調査票では「特別に支援を要する園児」、保育所の調査票では「障害児や特別に支援を要する園児」について聞いている。  
出典) ベネッセ次世代育成研究所「第1回 幼児教育・保育についての基本調査報告書」

※1 第3章-第1-2  
※2 第4章-1-(3)-ウ

インタビュー

●●● 幼児教育の視点から支援を考える ●●●

# 一人ひとりの心に寄り添う姿勢が特別なニーズをもつ子への支援につながる

特別なニーズをもつ子どもの支援では、保護者と連携しながら子どもが安心して過ごせる場所を整えることが大切です。そのためには、個々の保育者に対応を委ねるのではなく、園全体が“チーム”となって組織的に取り組む必要があります。園としての方針を固め、保育者の間で対応を共有するには、どのようなことを大切にすればよいのでしょうか。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の小田豊理事長にお話をうかがいました。



国立特別支援教育総合研究所理事長  
**小田 豊**

**おだ・ゆたか**  
文部科学省初等中等教育局主任視学官を経て現職。著書に、『家庭のなかのカウンセリング・マインド』（北大路書房）、『新しい時代を拓く幼児教育学入門』（東洋館出版社）など。

## 幼児期の子どもは本来誰もが「気になる存在」であるべき

近年、幼児教育にかかわるかたがたから、「気になる子どもが増えてきている」という話をよく聞きます。その背景には、2005年に施行された発達障害者支援法により、ADHD（注意欠陥多動性障害）やLD（学習障害）、自閉症、アスペルガー症候群などが「発達障害」として正式

に位置付けられ、広く知られるようになったことがあると思われます。以前なら「少し変わっているな」としか感じなかったケースでも、「発達障害かもしれない」と気になりやすくなっていることは意識しておく必要があるでしょう。実際に増えているかどうかは、研究者でも意見が分かれています。今のところ、人数は一定で推移しているものの、子どもの数が減っているため、「出現率」は高まっていると

いう見方が優勢ですが、これも断定されているわけではありません。発達障害者支援法は、発達障害の早期発見の重要性を強調しています。できるだけ早い時期から状態に合わせた支援を行うことで、子どもが安心できる場所をつくり出し、一人ひとりのよさを伸ばしやすくなるからです。一般に発達障害は、3歳ごろから特徴的な言動が表れますから、保育者は発達障害を発見しやすい立場

にあります。その意味では、すべての保育者が発達障害についての正しい知識をもち、子どもの様子を観察することが求められます。

ただし、幼児期の子どもは発達の個人差が非常に大きいことに気をつけなくてはなりません。例えば、ADHDの典型である「じっとしてられない」「自分が思いついたことを一方的にしゃべる」といった傾向は、幼児期の子どもが多くに見られるでしょう。幼児期の子どもが発達障害を判断するのは、専門家でも容易ではありません。他の子どもと少し違うからといって、「気になる子」と“レッテル”をはってしまうのは大変危険です。

保育者に求められるのは、「発達の途上にある幼児期は、元来、一人ひとりが気になる存在」であるという姿勢です。一人ひとり全く違う個性やニーズをもつことを前提にして、目の前の子どもに合った支援を追求するという幼児教育の原点に立ち戻ることが、発達障害の子どもを含め、すべての子どもにとってのよりよい保育につながるとお考えください。

## 4つの態度を意識して子どもの心に寄り添う

発達障害にかかわる問題は非常に難しいですから、個々の保育者に委ねるのではなく、園全体がチームとして取り組む必要があるでしょう。最初に園内で共有していただきたいのが、発達障害をもつ子どもの支援で大切にしたい4つの態度で

### 発達障害の子どもへの支援で大切にしたい「4つの態度」

#### 子どもの話を「聴く」

保育者自身がしっかりと心を傾けて「聴く」ことが大切。保育者が自分の話を真剣に聴いていることを敏感に感じ取れると子どもは安心し、次第に心を開きます。

#### 子どもを「受け入れる」

子どもにとって最もつらいのは、「自分が受け入れられていない」と感じることです。まずは子どもの視点から考えるように心がけてください。

#### 関心を最大に払いながら、ほうっておく

注意したい気持ちを抑え、子どもの気になる言動を「ほうっておく」ことも大切です。できるだけ叱るのを控えてよさをほめることで、子どもの自尊心が高まります。

#### 心の流れに添う

子どもの気持ちを決めつけたり、性急に正しい答えを教えたりするのではなく、子どもが何を感じ、考えているのかを聞き出し、子どもの心に寄り添った対応を心がけてください。

す。これは発達障害をもつ子どもだけでなく、すべての子どもに対して大切な態度です。

一つ目は、子どもの話を「聴く」ことです。適当にあいづちを打って聞き流すのではなく、「あなたの話を真剣に聴いていますよ」という強い印象を与えることで、子どもの中に安心感や信頼感が生まれます。

同時に子どもを「受け入れる」態度も大切にしてください。すべての子どもがもつ「自分を受け入れてほしい」という願望にしっかりとこたえるのです。

例を挙げましょう。登園後に決められた場所にかばんを置くというルールを守れない3歳児がいました。一日中、肩からさげて手放そうとしません。保育者は「邪魔にならないの？」などと声をかけつつ、子どものこだわりを受け入れて無理にルールに従わせませんでした。すると、3歳の終わり頃のある日、突然自分からかばんを置いて、以後は

何の問題もなく過ごしたのです。保育者が忍耐強く受け入れたことで、周囲の子どもに比べて時間はかかりましたが、本人がルールに納得して行動を変化させたのでしょ

。「関心を最大に払いながら、ほうっておく」という態度も大切です。発達障害の子どもは、「他の子どもと同じようにさせたい」という周囲の考えから、指示や命令、叱責を受けやすくなります。しかし、大抵、それはよくない結果を招きます。子どもの自己肯定感が低下し、成長に伴って不登校や暴力などの二次的障害が表れやすくなるのです。子どもが話を聞かないときなどに注意したくなる気持ちは分かりますが、あえてほうっておいて、じっくりと向き合える別の場面で伝えることも考えてみてください。

最後に、「心の流れに添う」という態度について説明しましょう。例えば、子どもから何か質問されたときに、大人はつい「正しい答え」を

教えるという気持ちで子どもに接しがちです。しかし、大人から性急に答えを示すのではなく、まず「あなたはどう思うの？」と聞いてみてください。きっと、大人には考えつかない答えが返ってくるでしょう。子どもの言葉に耳を傾け、子どもの心のありようを知ろうとする態度が、「心の流れに添う」ことです。それは子どもを深く理解するためにとっても大切です。

とくに発達障害の子どもは、知的に問題のない場合が多いため、他の子どもとは異なる心の動きをすることが見逃されがちです。ADHDやLDなどの子どもの多くは、何をすべきかを理解しているけれど、できないという自分に対して強いいら立ちを感じています。例えば、あなたが利き手ではない方の手に軍手をつけて一定時間内に文字の書き取りを指示されたとします。きっと思い通りに手が動かないことに焦り、いら立つでしょう。子どもの心の動きに注意を払い、寄り添うことで、一人ひとりに合った支援が見えてきます。

### 「一緒に考える姿勢」を保護者に示す

保護者への対応も、園としての一貫した方針をもつ必要があります。発達障害の子どもは、乳幼児期から「少し変わっているかもしれない」などと気づいている場合が多く、それとなく保育者に相談することがよくあります。そのようなとき、発達障害の可能性を認識して

いる保育者が、「大丈夫ですよ」「このまま見守りましょう」などと伝えることが少なくありません。こうした言葉は安心させたいという気持ちの表れであって、あまりよい結果を招きません。なぜなら、「相談に向き合ってもらえなかった」と不信感を抱かれることもあれば、「先生が言うのなら大丈夫だ」と安心させて、よりよい支援法を見つける機会を先送りしてしまうこともあるからです。保育者が園での様子を伝え、「一緒に支援を考えていきましょう」という態度を示すことで、保護者がひとりで悩みを抱え込まずに済みますし、連携して効果的な支援を行うこともできます。

さらに発達障害をもつ子どもの保護者に共通するのが、「よい親であらねばならない」という強いプレッシャーにさいなまれていることです。発達障害は育て方には起因しませんが、「しつけが悪かったのでは」といった自責の念をもつ保護



者がとても多いのです。当然のことではありますが、発達障害にかかわる対応のほかは、他の子どもの保護者と同様に接し、「無理する必要はなく、みなと同じように“普通”の親であっていい」というメッセージを伝えることは、保護者にとっては大きな励みになるでしょう。

繰り返しになりますが、幼児教育の原点に立ち戻って一人ひとりのニーズに合わせた支援を追求することが、結果的に発達障害の子どもへの有効な支援に結びつくことを、保育者のみなさんは心に留めておいていただきたいと思います。それは、教科の到達目標に向かって指導する小学校以降の教育とは違って、一人ひとりの心に寄り添って個性を伸ばしていく幼児教育だからこそできることでもあるのです。

### 現場のみなさんへ

◎幼児期は、人格の基盤を形成する非常に大切な時期です。そのような意義深い仕事に携わっていることに自信と誇りをもってください。ふだんから一人ひとりの気持ちに寄り添うことを大切にする保育者のみなさんは、きっと発達障害の子どもにも適切に接することができると思います。保護者のかたがたの気持ちを受けとめ、手を取り合いながら取り組みを深めていただければと思います。

## インタビュー

●●● 医療の視点から支援を考える ●●●

# 正しい知識とカウンセリングマインドで特別なニーズにこたえる

特別なニーズをもつ子どもの中でも、注意欠陥多動性障害（ADHD）やアスペルガー症候群といった発達障害がある子どもは、周囲の子どもと比べて行動パターンが異なるため、適切な対応が難しいという園も少なくないようです。

発達障害がある子ども、そしてその保護者への対応では、どのようなことに配慮すればよいのでしょうか。医師として発達障害の研究に取り組むお茶の水女子大学教授の榊原洋一先生にお話をうかがいました。



お茶の水女子大学  
大学院人間文化創成科学研究科教授  
**榊原洋一**

さかきはら・よういち

東京大学医学部卒業。東京大学医学部附属病院小児科を経て現職。専門は小児科学や小児神経学、発達神経学で、とくにADHDやアスペルガー症候群をはじめ、発達障害の臨床研究に力を入れている。著書に『図解 よくわかるADHD』『図解 よくわかる自閉症』（ナツメ社）、「集中できない子どもたち—ADHDなんでもQ&A」（小学館）など。

### 正しい知識による「見立て」で適切な対応がわかってくる

保育者のみなさんは、日々の保育を通してすべての子どもがそれぞれ異なるニーズをもつことを実感されているでしょう。そして経験や知識をもとに、個々の子どもへの対応の仕方を判断されているのではないのでしょうか。

特別なニーズをもつ子どもへの対応でも、基本的な考え方は同じで

す。ただし、周囲の子どもと比べて学習や行動のパターンが異なるうえに、個人差も大きいため、より注意深くニーズを観察して対応する必要があります。そのためには、発達障害への正しい理解が欠かせません。子どもの中にある行動の理由を理解できれば、適切な対応の仕方が見えてくるでしょう。

2002年に行われた文部科学省の調査では、小学校・中学校の通常学級に在籍する児童・生徒のうち6.3%

に発達障害がある可能性が示されました。発達障害には、ADHDやLD、自閉症、アスペルガー症候群などが含まれ、それぞれに特徴的な言動があります（次ページ図1）。

発達障害がある子どもの言動について知識を深めることで、保育者はそのような子どもの「見立て」ができるようになります。見立てとは、例えば、「こんな行動が見られるから、ADHDの可能性を考えた方がよいかもしれない」などと仮定



図1 発達障害の特徴や対応のポイント

発達障害の名称	症状の特徴	園での対応の例
注意欠陥多動性障害 (ADHD)	<ul style="list-style-type: none"> <li>不注意(物事に集中できず、忘れっぽい)</li> <li>多動性(落ち着きがなく、じっとしてられない)</li> <li>衝動性(衝動的な行動やとっぴな行動をとる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最前列の中央に座らせる。窓際や入口付近など雑音が聞こえる場所は避ける</li> <li>ルールや目標は見えやすい位置に掲示する</li> <li>活動を短く区切って途中で小休止を入れる</li> <li>子どもが話を聞かないときは、声に加え、肩をたたか手にさわるなどして合図する</li> <li>問題行動は「叱る」のではなく、「注意する」(「水を出しっ放しにしちゃダメ!」ではなく、「水を出しっ放しにしない約束だよね」)</li> </ul>
アスペルガー症候群 (知的な遅れやことばの遅れはない)	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉の理解や使い方が独特(たとえ話が分からない、人の話を聞くのが苦手)</li> <li>相手の気持ちやその場の状況を読み取るのが苦手</li> <li>興味や関心が狭く特定のものにこだわる(物事の順序にこだわるなど)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんなで座って話を聞く場面などでは、なるべく保育者の近くに座らせる</li> <li>子どもの気持ちが落ち着かないときの「避難場所」となる部屋や空間(狭い場所を好むことが多い)を用意しておく</li> <li>指示する前に、「よく聞いておいてね」などと、注意を促す</li> <li>予定の変更があるときは、直前ではなく、早めに伝える</li> </ul>
高機能自閉症 (知的障害が軽いかまったくない自閉症を指す)	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉の発達に遅れがある</li> <li>相手の気持ちやその場の状況を読み取るのが苦手</li> <li>興味や関心が狭く特定のものにこだわる(物事の順序にこだわる、同じ動作を繰り返すなど)</li> </ul>	

※読み書きや計算などの能力の習得が困難な「学習障害(LD)」の症状は、小学校に進んでから表れやすい。  
 ※アスペルガー症候群と高機能自閉症は、言語能力の遅れの有無以外に大きな違いはなく、同じ障害ととらえる専門家もいる。

して考えることです。発達障害の可能性を念頭に置くことで、保育者は発達障害に関する書籍や研究例などから対応のヒントを考えることができるようになります。ただし、注意したいのは見立てはあくまでも仮定であり、“レットル”をはることは大きく異なるという点です。大人の視点から決め付けてしまうのではなく、常に子どもの立場に寄り添うように心がけたいものです。

### 「病気」と思うのではなく「違い」ととらえる

発達障害は生まれつきのものがあり、しつけが悪いことが原因ではありません。ただし、周囲の対応の仕方によって行動の表れ方は変わります。周囲の大人の対応の違いに

より、ADHDの子どもがどのように発達するかを調べた研究があります。いつも叱っていると状態が悪化する傾向がありますが、子どもの気持ちを受け入れて育てると、次第に問題行動は少なくなります。

発達障害がある子どもへの対応で何より心がけなくてはならないのが、「障害を治す」というスタンスを取らないことです。発達障害は「治さなければならないもの」ではなく、「違い」ととらえる必要があります。「問題」は、子どもの中にあるのではなく、子どもの行動によって起こる周囲との摩擦の中にあるのです。

そう考えると、いかに摩擦を起こしにくい環境を整えるかが、対応のポイントになることを理解していただけるのではないのでしょうか。発

達障害の種類によって異なりますが、例えばADHDの場合、「なるべく最前列の中央に座らせる」「視覚や聴覚の刺激が入りやすい窓際や入口近くは避ける」といった対応によって、問題となる行動が表れにくくなります。

摩擦が見られたときでも、子どもには決して悪気はありませんから、頭ごなしに注意することは避けたいものです。

また、周囲との摩擦は、子どもではなく周囲の大人がかかわることで軽減できる、という視点も重要です。子どもが力を発揮できる環境で育つことで、次第に自尊感情は高まり、周囲の子どもとのかかわり方も学んで、特有の行動が表れにくくなります。

### 園での様子を具体的に伝え 保護者と信頼関係を築く

次に、発達障害がある子どもの保護者への対応について考えたいと思います。

現代日本では少子化によって、子育ての経験が減っています。初めての子どもだときょうだいと比べるとできませんから、保護者が発達障害の可能性に気づきにくくなっているのは当然と言えるでしょう。そのため、毎日たくさんの子どもを見て、「3歳児ならこれくらいはできるだろう」といった物差しをもつ保育者の存在が重要になります。

発達障害はデリケートな問題ですから、保護者への情報の伝え方には細心の注意を払わなくてはなりません。発達障害が疑われる場合でも、「発達障害があるようですから病院で見てもらってください」などと断定的に言うのはいけません。この場合、保護者は「自分ひとりで問題を背負い込まされている」と感じたり、「園から追い出されるかもしれない」と思って防御的になったりして、その後の連携が難しくなります。

まずは、発達障害という言葉を使わず、「集団の中でじっとしてられない」「なかなか保育者の指示が理解できない」などと、具体的な問題を伝えます。クラスに入って保護者にも見ってもらうか、難しい場合は保護者から許可を受けたくてビデオ撮影してもいいでしょう。実際

の場面を見てもらえば、保護者の納得は得られやすくなります。

同時に、園ではどのような対応や指示、また環境づくりをしているかを具体的に説明しましょう。そのうえで、「それにもかかわらず、うまくいかない」と話せば、保育者の努力は伝わるでしょう。

このような段階を経て、はじめて発達障害の可能性に言及し、専門家への相談をすすめます。このときも、「保育者として、お子さんにどのように対応すべきかを知りたいので」などと、協力的なスタンスを保つことが大切です。時間が許せば、保育者も同行するとよいでしょう。保護者は安心し、さらに相互の信頼関係も深まるでしょう。

### 子どもの成長を支える パートナーという姿勢で

発達障害がある子どもとその保護者に向き合う際には、つねに相手に受容的な態度を示すカウンセリングマインドを大切にしてください。そして、その前提として、保育者には発達障害に関する正しい知識も必要になってきます。



周囲の大人の対応によって、発達障害のある子どもの育ち方が大きく変わるのは前述した通りです。特に幼児期は社会生活の経験が少ないため摩擦を起こしやすいのですが、適切な対応を続けられれば、子どもは成長に伴って周囲とのかかわり方を学んで問題を起こしにくくなります。

そのことを伝えるのは、保護者にとっては励みにも重圧にもなり得るでしょう。保育者が、ともに子どもの成長を支えるパートナーという姿勢を一貫して示すことで、きっと保護者の重圧は和らぎ、前向きな気持ちで子育てに向かうことができるはずです。

### 現場のみなさんへ

◎特別なニーズをもつ子どもに対し、保育者のみなさんは「自分なり」のやり方を見つけて対応されていると思います。なかなか時間が無いとは思いますが、園内研修などを通して個々の経験を共有してください。そのように横につながれば、子どもの見方がさらに広がってより良い対応ができるようになります。園全体の保育の質は高まっていくはずです。

# 保護者が育つ園の支援

古来より「親が育てば子は育つ」とか、「親の背中を見て子は育つ」などと、保護者の存在の大きさが言われてきました。教育基本法では、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するもので（後略）」とあります。今、園では「親も子も育つ」運営をめざしています。

保護者育ては園の役割の一つです。保護者の子育てが無意識的なものから、意識的、意図的なものに少しでも向かうことが望まれます。このことに向けた園の支援が望まれます。

この章では、園からの情報発信と、保護者が保護者として自覚をもち、自ら育つ園運営のポイントを紹介します。

保護者の成長を促す園の支援

P.17

思いを伝える情報発信で  
保護者と「つながる」園をつくる

P.20

Q&A 保護者との関係づくり  
こんなときはどうする？

P.24

## 保護者の成長を促す園の支援とは

インタビュー

### 今求められている保護者支援のあり方

地域や家庭における人間関係のつながりが弱くなり、子育てに悩む保護者が増える傾向にあります。それと同時に、園に対する保護者の期待も高くなっているようです。子どもとともに保護者自身も「保護者として」成長していくために、園ではどのような支援ができるのでしょうか。発達心理学を専門とする子安増生先生にお話をうかがいました。



京都大学大学院教育学研究科教授

**子安 増生**

こやす・ますお

京都大学大学院教育学研究科教授。専門は発達心理学。2008年より日本発達心理学会理事長、2011年より日本心理学会連合理事長を務める。著書に、「幼児期の他者理解の発達」（京都大学学術出版会）、「心の理論」（岩波書店）、共著に「幼児が「心」に出会うとき-発達心理学から見た縦割り保育」（有斐閣）など。

自分の子ども時代を振り返り  
子育てに客観性を  
保つことが大切

もしかすると、現代は子育てが難しい時代かもしれない——私はそう考えることがあります。核家族化が進んで体験にもとづいた子育ての知識や経験が受け継ぎにくくなって

いる一方、テレビやインターネットにはさまざまな情報があふれている。保護者が子育てに迷いをもつのは当然と言えるかもしれません。その結果、幼稚園や保育所に多種多様なテーマについてアドバイスを求めるだけでなく、保育者に過剰な期待や要求を寄せるようになる保護者が増えているのだと考えられます。

保護者の抱く不安や心配を取り除くには、まず、子どもの発達についての確に理解してもらうことが大切です。そこで発達心理学の見地から、保護者に対してどのようなサポートや助言ができるかをお話ししましょう。

私が保護者に対して強調して伝えるのが、常に客観的な視点をもって



み出した概念で、親子の情緒的・心理的なつながりを指します。ボウルビイは第二次世界大戦で孤児になった子どもの心身の発達が遅れた要因は、医学的なケアよりも、ヒューマンケアにあると指摘して、愛着関係の大切さを訴えました。

愛着と子どもの発達の間を、このようなテストがあります。母親と子ども、そして見ず知らずの他人の3人がしばらく同じ部屋で過ごした後、母親だけ、または母親と他人と一緒に室外に出ます。すると、どちらの場合も、愛着関係が十分な親子の場合、子どもはあまり動揺しませんが、不十分な場合は母親から離れると、心理的に非常に不安定になります。この結果は、しっかりとされた親子関係があれば、子どもの自立がスムーズになることを示唆しています。

乳児期は親子がずっと一緒に過ごすのも良いのですが、やがて発達に伴って離れる場面が生じてきます。タイミングとしては、幼稚園や保育所に入る、子ども部屋をつくる、あるいは小学校に入学するときなどが考えられるでしょう。

こうした節目では、心理的な愛着を保ちながらも、かたちの上では明確に接し方を変えなくてはなりません。それが「ぴったりくっつく」こと、ぴったり離れること、というのです。そのような体験の積み重ねにより、子どもの自立心が育っていくのです。

これは、親にとっては「子離れ」のきっかけとなるでしょう。いつま

でも親が子どもの身のまわりの世話をしていたら、子どもが何でもできるようにならないのは当然です。にもかかわらず、「うちの子は何もできない」と嘆く親をよく見かけます。こうした悪循環に陥らないためには、保護者が子どもの力のある程度信じ、子どもに任せる範囲を徐々に増やしていく必要があるでしょう。

繰り返しになりますが、子どもと「離れる」ときでも、常に心理的なつながりは実感させることが重要です。手のひらを返すように冷たい態度を取れば、愛着関係が崩れてしまいかねません。つまり、「ぴったりくっつく」と「ぴったり離れる」はセットになっているのです。

### 発達に応じて使い分けたい「号令・命令・訓令」

子どもの発達に伴い、語りかけ方も変えてください。その際、「号令・命令・訓令」の3つの考え方を意識すると、発達段階に応じた伝え方ができるでしょう。これは保護者だけでなく、保育者にもぜひ知っていただきたいことです。

号令は「○○をしなさい」と行動だけを伝え、命令は「○○だから、○○をしなさい」と理由も示します。一方、訓令は「○○をしなさい。方法は任せる」と、自由度をもたせた言い方です。

乳児に対して命令をしても理解してもらえませんから、号令のほうが

適切です。逆に5歳児に号令ばかりをしていたら、自分で考えて行動する力が育ちませんので、理由を伝える必要があるでしょう。また訓令はかなり高度ですので、一般的には小学生になってからと考えてよいでしょう。

もうひとつ、語りかけ方についてお話ししましょう。生活や保育の中で「駆け・引き」の言葉を意識することの大切さです。

「駆け」は、「もっとがんばって」「もう終わっちゃうの?」「まだできるでしょう」などと、子どもを励まして奮い立たせる言葉。一方、「引き」は、「よくがんばったね」「今日はこれくらいにしよう」「また明日やろうか」など、子どもを認めて活動を終わらせる言葉です。明らかに疲れている子どもに対して、駆けの言葉をかけるのは酷なだけでなく、信頼関係を損ないかねません。きちんと引きの言葉をかければ、子どもは「自分を受け入れてくれた」と満足し、次もがんばろうという気持ちになるでしょう。場面に応じて、どちらが適切かを判断してください。

### 信頼関係を構築するカギは保護者との約束を守ること

最後に、保護者との関係づくりについて考えてみましょう。保護者の中には、幼稚園や保育所に頼りすぎて、「どんなことでも対応してくれるはず」と考えるかたもいるかもしれません。しかし、現実には保育者

のできることに限りがありますから、ときには断然なくてはならないこともあるでしょう。そのようなときに、保護者との関係をギクシャクさせないためには、日ごろの信頼関係が前提となります。

すべての人間関係の基本ですが、保護者から信頼されるには約束を守らなければなりません。保護者との約束とは、個々に口頭で交わしたものでだけでなく、教育方針など園全体として打ち出しているものも含まれます。

約束を守るには、「守れない約束はしない」ことも大事です。安請け合いをしたり、全てを園が背負い込もうとしたりせず、ふだんから自分たちのできることに自覚的になっていくとよいでしょう。信頼関係さえできれば、例えば、子どもの体調に関する質問に対し、「それは園ではなく、病院で聞いてください」と返答しても、おそらく冷たくあしらわれたという悪い感情は抱かれなくていいでしょう。保護者が保育者に信頼を寄せていることは、子どもにも必ず伝わり、子どもと保育者の関係にも良い影響を与えるはずですよ。

子育てには悩みが付きものですが、もちろんプラス面も多く、特に子どもを通して人生を生き直すことができるのが最大の喜びだと、私は考えています。そのような子育てのプラス面を伝えることも、保護者の不安や心配を減らすとともに、信頼関係や協力関係を築いていくためのカギとなるのではないのでしょうか。

※2010年春号掲載

子育てをしてほしいということですが、例え話ですが、おそろくちょうちょうは青虫を見て、かつての自分の姿とは思わないでしょう。同様に大人はかつて自分が子どもだったことを忘れがちです。子どもには子どもなりの苦しさや悲しさ、また楽しさや喜びがあり、それらに共感できないと親子の気持ちにギャップが生じます。保護者は「自分は親から何を言われてつらかったか、うれしかったか」などと、常に自身を振り返る必要があるでしょう。

客観的な視点をもてないと、保護者は子どもの成長を長い時間の中でとらえられず、ちょっとしたことに不安を抱くようになります。例えば、オムツ外れが多少遅くなくても大問題ではないことは、客観的に考えれば

分かるでしょう。しかし、わが子となると、そう考えられない親が少なくありません。そのような保護者には、今現在の出来事だけに集中せず、長い時間の中で子どもを見守ることの大切さを伝えるとよいでしょう。

### 愛着関係を保ちながら親子が離れていく体験が重要

次に、子どもの発達に応じて接し方を変えることの大切さをお話ししましょう。私はこれを「ぴったりくっついて、ぴったり離れること」と言い表しています。

「くっつく」は、「愛着」と言い換えられます。愛着とはイギリスの児童精神科医ジョン・ボウルビイが生

# 思いを伝える情報発信で 保護者と「つながる」園をつくる

園がどのような考えのもとで保育を行っているかを  
よりわかりやすく保護者に伝えることは、保護者の協力を得て保育を行い、  
園をよりよい場とするための有効な手段です。

## インタビュー

### エピソードとプロセスで、園の「見える化」を

保護者に対して積極的に情報を公開し、交流を深めているにもかかわらず、  
保護者対応の難しさを実感している園も少なくありません。保護者との関わりを考えるうえで、  
何がポイントになるのかを子育て支援に造詣が深い大豆生田先生にうかがいました。

### 難しくなってきた保護者とのコミュニケーション

#### 子育てを取り巻く状況が 大きく変わったことが要因

近年、「保護者とのコミュニケーションが難しくなった」という保育者の声をよく耳にします。これは、  
マスコミで紹介されるような意思疎通が極端に難しい保護者が増えた  
ためなのではないでしょうか。私はもっと

社会的な、別の理由があると考えて  
います。

そもそも、子育てを取り巻く状況  
はこれまでと劇的に変わっています。核家族化で両親の育児の負担は  
大きくなり、さらに共働きの家庭が一般的になったことで、結果的に保護者の  
子育ての苦労は増えています。また、少子化の進行で、保護者



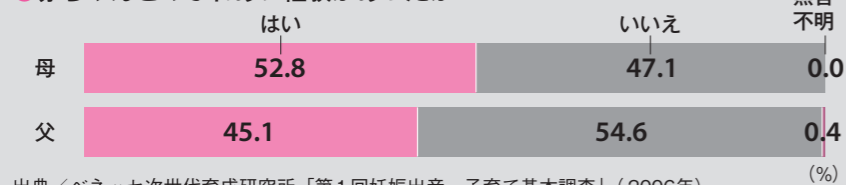
玉川大学教育学部  
乳幼児発達学科准教授  
**大豆生田啓友**

おおまめうだ・ひろとも  
専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。著書に、「これでスッキリ! 子育ての悩み解決100のメッセージ」(すばる舎)、「よくわかる子育て支援・家族援助論」(ミネルヴァ書房)など。

#### 保護者の現状 赤ちゃんとふれあう経験がないまま親に

ベネッセ次世代育成研究所が行った調査では、「子どもの頃から今まで(第一子を妊娠/出産するまで)に赤ちゃんと身近に接したり、世話をした経験があった」という保護者は、母が52.8%、父が45.1%であった。母・父ともに約半数の人が赤ちゃんとふれあいの経験がないまま親になっている。

#### ●赤ちゃんとふれあひ経験があったか



出典/ベネッセ次世代育成研究所「第1回妊娠出産・子育て基本調査」(2006年)

の子育てのスタイルは「一児豪華主義」になり、わが子への期待は高まりがちです。その分、園に対する要望も多様で、大きなものとなっていく、それが叶わないと不満も高まります。

つまり、これまでは家庭や地域でなされていたことが十分に行われ

なくなり、さらに「保育のサービス化」という社会的な風潮によって、園に多くのことが求められるようになってきているのです。加えて、近所に子育ての悩みを打ち明けられる人がいないなど、保護者の孤立化も進んでいます。

園と保護者のコミュニケーション

ンが難しくなったのは事実だとしても、その原因を目の前の保護者にだけ求めるのは適切ではないと思うのです。むしろ、保護者が変わったというよりも、子育てを取り巻く社会全体が変化したのだと、私たちは認識すべきだと考えています。

### 園は、何をしているかわからない「ブラックボックス」!?

#### 保育の「プロセス」を 保護者に伝える

このような中で、園と保護者が円滑にコミュニケーションしていくためのひとつの方法としては、園からの情報発信の仕方を見直す必要があるでしょう。

幼児教育の現場で働いていたひとりとして、私も以前は、保育者が一生懸命にやっていること、そしてその意図や情熱が保護者に必ずしもきちんと伝わっているとは限らないと感じることがよくありました。園として、またひとりの保育者として、保護者に情報を発信しているはずなのに、子どもの様子や保育者の考えが伝わっていないのはなぜでしょうか。

それは園からの情報が、どんな行事・活動を行っているかといったものが中心になっていて、子どもがどんなことを経験し、保育者がそれによってどのように働きかけ、そして子どもはどのように成長しているかなど、保護者が本当に知りたいことが十分に伝えられていないからではないでしょうか。園での出来事が表面的に

しか伝えられていないため、園で行われている保育の意味が保護者には実は見えていないのです。いわば、園が「ブラックボックス」になっていることが少なくない気がします(下の「私の失敗談」参照)。

園の保育の意味がわからないままだと、例えば運動会でも、保護者

の関心は練習を通じた成長のプロセスには向かわず、「うまく走れたか」「お遊戯ができたか」という結果にしか向かいません。保護者は、運動会を単なるイベントとしてしか理解できていないのですから、それは当然のことです。

しかし実際には、運動会本番まで

#### 大豆生田先生が 振り返る 私の失敗談

#### 成長プロセスを保護者に語っていなかった

私が保育者として現場にいたときの話です。注意深く関わっていたある子どもが、園で昆虫をたくさん捕まえました。自分の方で遊びをつくることができたことがとてもうれしくて、私はお迎えにやってきた保護者に「こんなに虫を捕まえたんですよ!」と見せました。ところが保護者から返ってきた言葉は「え? それを家に持って帰らないといけないんですか?」という一言。

子どもがどんな気持ちで昆虫を捕まえたのか、保護者はなぜわからないんだと、そのとき私は怒りに震えました。でも、時間が経って振り返ってみると、実は悪いのは私だと気づいたのです。というのも、入園してから、その子自身がどんな状況で困っていて、それに対して私がどう関わってきたのか、保護者にしっかりお話ししていなかったからです。

私にとっては子どもの成長の証だったのに、保護者の目にはただの昆虫にしか映らなかったのです。それは、私の情報発信が不十分で、保育をブラックボックスにしていたからなのです。



に子どもたちは一生懸命練習し、友だちを助けたり、アイデアを出し合ったりしながら、実に豊かな時間を積み重ねてきています。このような運動会本番までのプロセスを園が保護者に伝えていなければ、保護者の関心はわが子の当日の出来不出来にしか向かいません。

保育者はどんな働きかけを行い、子どもたちがどんな成長を遂げてきたのか、そのプロセスをきちんと伝えていけば、同じ取り組みを見ても、保護者の意識は大きく違ってくはず。「今回の運動会の見どころ」などと題して、プログラムや園だよりなどで事前にお知らせするのもひとつの手段です。子どもたちがこだわって練習してきた点を写真やイラストなどを使って紹介

すれば、より保護者に伝わりやすくなるはず。

多くの園では今、さまざまな手段で情報発信を積極的に行っています。情報発信のツールの特性を生かしながら、プロセスをしっかりと伝えていきたいものです。

### 子どもの「エピソード」があって初めて納得できる

保護者とのコミュニケーションの際に、もうひとつ大切にしていたいただきたいのが、エピソードを盛り込むことです。

例えば、自分の子どもは友達づきあいもうまくできていないのではと心配している保護者に、保育者が「3歳児はひとり遊びや並行遊びが多いものですよ」と言ったとしま

す。確かにそれは事実でしょう。でも、きっと保護者の心配はなくなりません。「そうはいつでも、ほかの子は友だちと遊んでいるではないか」と思ってしまうものなのです。たとえ正論であっても、一般論のまま述べては保育者の考えは保護者の心には届きません。

大切なのは、保育者だからわかる子どもの成長のエピソードが盛り込まれているか、そして、今後の見通しと保育者がどう関わろうとしているかを語っているかです。これらがあって初めて、保護者は自分の子どもをちゃんと見てもらっていると思うことができ、安心できるのです。

子どもの変化や成長など、日々のエピソードを交えながら、今後の見通しや自分の思いを語るの、子どもを間近で見ている保育者だからできることです。「大丈夫ですよ」「元気ですよ」で片付けてしまっただけでは、保護者はかえって不安になってしまうかもしれません。保育者は当然だと思っていることでも、具体的なエピソードがあってこそ、保護者に伝わるのです。

プロセスとエピソードを大切にされた情報発信は、保護者が子どもをこれまで以上に理解することにも役立ちます。保育者は、園の遊びの中で子どもがどれほど成長しているか、さまざまなエピソードをもっていますから、それを保護者に伝えることで園への信頼感は高まりますし、家庭とは違う子どもの見方を知るでしょう。その結果、家庭での子どもへの接し方も変わってくるはず。

## 保護者を対等なパートナーとして見る

### 保護者が安心できる 雰囲気をつくる

保護者とのコミュニケーションがうまくとれている園を見て感じるのは、「保護者を対等なパートナーとして見ている」ということです。

例えば園の行事への参加を募るときも、保護者一人ひとりの意向や個性を尊重し、保護者も行事を楽しむことができるように配慮しています。それぞれの保護者の事情や得意不得意を考慮せず、「親なんだからこれくらいやって当たり前」と、園の一方的な思い込みでつくられた行事は保護者には苦痛ですし、今後の参加には結びつきません。

子どもと同様、保護者の主体性や個性を尊重し、保護者一人ひとりも輝かせながら園と一緒につくっていくという気持ちをもつことが大切なのではないでしょうか。

また、子どもに対してそうであるように、保護者一人ひとりに対して肯定的なまなざしを向けることも必要でしょう。「毎日の仕事がいへんな中で、慣れない子育てをよくがんばっていますね」と寄り添うことも大切です。

園が「コミュニケーションが難しい」と思っている保護者は、保護者自身も園からよく思われていないかもと薄々気がついているものです。「自分はちゃんと子育てができていない」「園は自分にお説教したいはず」などと身構えて、園に対して関わりたくないと思っている傾

大豆生田先生が考える 保護者との関係づくり 4つのステップ

保護者との信頼関係が構築できていない段階で、「お子さんに朝ごはんをちゃんと食べさせてきてください！」などというと、保護者は心を閉じてしまいます。保護者との関係づくりは、この4つのステップで考えるとよいでしょう。

- 1 園や保育者が安心できる場や人であると感じられる雰囲気を作る
- 2 先生に気軽に話せる、話しかけられてもいいという信頼関係を構築する
- 3 原則的には保護者自身から悩みをもちかけてもらう。それが無理ならば、「最近どうですか？」と話しかけてみる
- 4 保護者から話を聞き、どう解決するかを一緒に考え、具体的なアプローチを行う

コミュニケーションがうまくできていないと感じるときは、1、2のステップがきちんとできているかどうかを確認してみましょう。

### 園からの情報発信のねらい

#### ◎園の考えや保育者の思いを伝える

一人ひとりの保護者とじっくり話をする機会は意外に少ないものです。園全体の理念や方針、園長や保育者の考えを伝えることも必要です。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→園だより、クラスだより

#### ◎保育の様子をよりイメージしやすく伝える

保護者が最も関心を寄せているのは、クラスの中で日々子どもたちはどのように過ごしているかです。子どもたちの表情や、保育者の関わりなどが具体的にイメージできるような情報発信が求められます。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→園の掲示板、クラスだより、ホームページ、ブログ、写真掲示、ドキュメンテーション

#### ◎保育を体験することで保護者が子どもを理解する

保育者の子どもへの関わりかたや遊びの中での学びを知ることは、保護者にとって自分の子育てを見直すきっかけにもなります。保育の現場を見て、保護者にも実際に保育に参加してもらうことも、情報発信のひとつです。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→保育参加、行事での保護者参加、サークル活動

#### ◎双方向のやりとりで、保護者と信頼を深める

子育ての経験が乏しく、周囲に相談ができる人も少ない保護者の疑問や不安は、日々変わっていきます。送迎時に子どもの1日の様子を伝えるだけでなく、保護者が疑問や不安を気軽に打ち明けられるツールも必要です。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→連絡帳、個人面談、保護者のお茶会

向があります。このような保護者に対しては、まず保護者が安心して園と話ができる雰囲気をつくっていただきたいと思えます。コミュニケーションが難しいと感じる保護者にこそ、相手を身構えさせないよう、どうか明る

く、元気に、笑顔で声をかけてください。送迎時の声かけや、連絡帳でのコミュニケーションを通して、「応援していますよ」という保育者の思いをわかってもらうことが、保護者との関係の土台になるのです。

### 現場のみなさんへ

社会状況の変化から、今、園には多くのことが求められています。現場の保育者のみなさんのご苦労を想像すると、頭が下がる思いです。そんな中で保護者とのコミュニケーションを充実させていくのは、大変だと思われるかもしれません。しかし、家庭の存在を抜きにしてこれからの幼児教育は考えられません。幼児教育は、その成果がすぐには見えにくいものです。だからこそ、園で行われていることを「見える化」して、保護者の賛同と協力を得ていくことが大切だと思います。子どもの成長の様子をしっかりと伝えて、保護者とともに子どもを育てていく園であってほしいと思います。

# Q & A

## 保護者との関係づくり こんなときはどうする？

子どもと同様、保護者の個性もさまざまですから、中には関係づくりに苦慮することもあるものです。当研究所に寄せられた保護者に関する悩みの中でも特に多かったものについて、3名の先生がたにアドバイスをいただきました。

### 1 生活習慣ができていない

**Q** 早寝早起きの習慣がなく、朝食抜きの子供がいます。保護者には声をかけていますが、なかなか改善しません。どうしたら保護者としての自覚を持ってもらえるでしょうか。



**A1** 大豆生田先生  
保護者の事情を理解して共感する気持ちを

「親がルーズだからだろう」と頭ごなしに否定せず、まずはそれぞれの家庭の事情の中で子育てを頑張っているという気持ちを持つことが大事だと思います。「いつも頑張っていますね」といった一言で、保護者は「もう少し頑張ってみよう」と思えるものです。  
保護者は保護者なりに困り、努力していますから、相手の立場を思いやって共感することから始めてほしいと思います。そんなやりとりを続けるうちに、保護者は「なかなか早起きできなくて困っている」などと自分から悩みを打ち明けられるようになるかもしれませんし、保育者のアドバイスも素直に受け入れるようになっていくと思います。

**A2** 遠山先生  
お願いするときは理由をいっしょに伝える

単に「朝ごはんは必ず食べさせてください」と言うのではなく、どうしてそれが子どもの育ちにとって重要なのかを理解してもらうことが先決だと思います。このケースでいえば、午前中はみんなで遊ぶ時間帯なのに、お腹が空いていけば元気が出てくなくてつまらない思いをしてしまいます。そのように根本にある考え方を理解してもらうことで、「忙しいけれど何とかしてみよう」という気持ちが自然と強まるのではないのでしょうか。  
また保護者に「指導」するという気持ちを持たず、ともに子どもを育てる関係として協力をお願いするというスタンスが大切だと思います。

### 2 保護者自身が判断できない

**Q** 「子どもが園服を着てくれないのですが、どうしたらいいですか」など、細かい確認の連絡が多く、「自分で判断してほしい」と思ってしまう。こうした保護者にはどのように接したらよいでしょうか。



**A1** 大豆生田先生  
保護者間の関係づくりが育児の不安を軽減

育児について相談できる人が周囲に少ない保護者は、不安になりやすいものです。育児書を開いても、我が子にぴったりと当てはまる答えが書かれているとは限りません。保育者としては、保護者の悩みを受け入れ、可能な範囲で答えればよいと思います。  
ただ、1対1の関係の中で何でも質問される状況では、保育者に負担がかかってしまいます。その点、保護者同士の関係ができていれば、「そんなの大丈夫」「うちもそうだった」などと経験を語り合い、安心できるようになります。保護者同士で解決できることも多いのです。

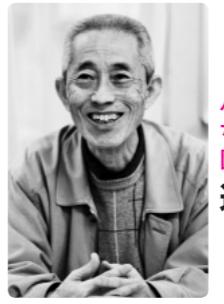
**A2** 鈴木先生  
子育ての責任も自覚していただくことが大切

朝、保護者から子どもが38度の熱を出していると電話があり、お休みの連絡かと思ったら「休ませたほうがいいでしょうか？」と聞かれて驚いたことがあります。このように保護者の判断に任せたいことを確認されるケースが増えている背景には、「誰かに判断してほしい」「私の声を聞いてほしい」といった保護者の依存心があると感ずることがあります。例えば、「園服を着てくれない」という裏には、「子どもが言うことを聞かない」という心の叫びがあるのかもしれません。  
単に分からないときは、細かいことでも保育者は答えたいほうがよいでしょうが、過度に保育者に頼ろうとしている場合は、「子育ての一番の責任は家庭」と伝えていく必要があると思います。

### 回答者



玉川大学教育学部  
乳幼児発達学科  
准教授  
大豆生田啓友先生



バオバブ保育園  
ちいさな家  
園長  
遠山洋一先生



花の井保育園  
園長  
鈴木美岐子先生

### 3 特定の保育方法に傾倒してしまう

**Q** テレビなどの影響か、保護者から特定の保育方法を求められることが少なくありません。中には、園の活動を「遊んでいるだけ」ととらえている保護者もいます。どうすれば園の保育について理解してもらえるでしょうか。



**A1** 大豆生田先生  
遊びを通した学びの意味を地道に伝える

そういった保護者には、園の日常的な取り組みの意味がしっかり伝わっていないのかもしれませんが、だからこそ、テレビで紹介されるような刺激的な教育に飛びつきたくないのでしょ。背景には、子育てなどいろいろなことへの不安があるのかもしれませんが。  
本来、幼児教育はゆっくりと成果が表れる地道なものです。園としては、遠回りに見えますが、自分たちが実践する教育・保育の意味を誠実に伝えることが大切です。園での遊びを通した学びは、すぐに成果が表れるものではありませんが、その後の人間的な成長の根っこを形成していくものであることを繰り返し発信していきましょう。

**A2** 鈴木先生  
専門職として必要性を精査すればいい

私の園では保護者会などを通し、園の理念や経営方針などを伝えていきます。「しっかりとした考え方を持っているな」と感じてもらえれば、こうしたケースはあまり起こらないと思います。  
それでも要望があったときは、否定せず、専門職の観点から子どもに必要なかどうかを精査します。そして必要と判断したら子どもの実態に合った形で導入を検討し、不必要ならば保護者に改めて園の理念や方針を伝えます。こうした要望を寄せてくださるのは、子どもの教育に関心をもっている証です。「言ってくださってありがとうございます」というスタンスで接すれば、保護者の気持ちを害することもないと思います。

### 4 保護者の心が不安定である

**Q** うつや育児ノイローゼなど、精神的に不安定な保護者への適切な対応について教えてください。



**A1** 遠山先生  
先入観をもたず、まずはゆっくりと話を聞く

最近「〇〇症候群」などと、いろいろな症例の名前がありますが、まずはそのような先入観にとらわれずに、ゆっくりと話を聞くことが大事だと思います。その保護者の事情や悩みを理解しアドバイスすることで、状態が改善することもあるでしょう。  
担任一人では対応が難しいと感じたら、一人で抱え込まず、ベテランの保育者などに相談してチームでかかわることが大切です。さらに、状況が園の力量を超える場合は、無理をせずに医療機関などの専門家と連携してチームで対応すべきだと思います。

**A2** 鈴木先生  
「ここは安心してよい場所」というメッセージを

ストレス社会にもまれながら子育てをする保護者のつらさを受け止め、じっくりと話を聞いて、「ここは安心してよい場所ですよ」というメッセージを送ることが大切だと思います。そのようなかわりに安心感を抱いて落ち着きを取り戻す保護者は少なくありません。  
しかし、そうした保護者への対応は時間も労力もかかります。保育者が一人で抱え込むと相当な負担になりますし、客観的に見られなくなるおそれもあります。職員間で情報を共有し、園全体でサポートしていく体制が不可欠といえるでしょう。

# 保育者が育つ 園づくり

子どもは保育者との信頼関係が成立することで、安心して自分らしく行動し、生活を豊かにしていくことができます。また、友だちとの関係も構築できるようになります。そのためには、保育者自身が自信をもって保育にあたるのが望まれます。

保育者が自信をもち成長するためには、園長のリーダーシップが大切です。保育者が育つ道筋を考えた計画的な研修の工夫や、園長が中心となって保育者が育つ園の風土づくりが求められます。

この章では、園内研修と若手の保育者が育つ園の風土づくりのポイントを紹介します。

保育者の資質を高める園内研修

P.27

若手の保育者がのびのびと育つ  
温かい園の風土づくり

P.35

特集

## 保育者の 資質を高める園内研修とは

「すぐに、手軽に、効果的に」取り組める実践のポイント

インタビュー

### 振り返り、課題を見つけ、 改善を図るサイクルを

ベネッセ次世代育成研究所の調査では、幼保・公私ともに、園が直面する最大の課題は、「教員（保育士等）の質の維持・向上」でした。（29ページ表1）この課題を解決するための鍵を握るのが園内研修です。保育の質の向上を研究テーマのひとつとする東京大学の秋田喜代美教授に、これからの幼児教育に求められる研修についてお話をうかがいました。

東京大学大学院教育学研究科教授 **秋田喜代美**

あきた・きよみ 東京大学大学院教育学研究科教授、日本保育学会会長。専門は発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、「保育の心もち」（ひかりのくに）、「今に生きる保育者論」（共著、みらい）など。



### 保育者の専門性をみかくとともに園内に一体感を生み出す効果

保育者の質の維持・向上という課題に効果的にアプローチするには園内研修の実施が欠かせません。その方法についてお話しする前に、まずは保育者の質について改めて考えてみましょう。

幼保を問わず、保育は高い専門性が求められる専門職です。これは改定保育所保育指針の中に、保育者は「専門性の向上に努めなければならない」と記されたことにも示されています。

専門性を高めるとは、具体的にはどのようなことを指すのでしょうか。まず、保育が専門職である以上、基本的な知識・技能を備えているだけでは不十分と言わざるを得ま

せん。知識・技能はあくまでもベースにすぎず、職業的倫理観の上立ち、一人ひとりの子どもの実態や環境に合わせて、複雑な状況への即興的判断にもとづいて、そのときどきに適した保育を提供する必要があります。それこそが専門性の高い保育、つまりは質の高い保育と言えます。これは、同じく専門職である医師が医療の知識・技能を駆使し、一人ひとりの患者の症状に合わせて多様な治療を施すことに似ています。

とはいえ、養成校ではまずは知識・技能の習得に重点がおかれますから、経験の浅い保育者は、そのような判断の専門性を備えているとは限りません。例えば養成校では、「一

人ひとりの子どもの思いを大事にすることが必要である」と教わります。それ自体は正しいのですが、ベテラン保育者は、時期や状況によっては対応を変える必要があることを知っているでしょう。

ある若い保育者から、「活動中、子どもたちにあちこちから声をかけられて、どう対応していいのかわからない」と相談されたことがありました。その先生は養成校で学んだことに忠実に従い、一人ひとりに向き合うために走り回っておられました。こうした場面では、全員に個別に対応するよりも、全体を見ながら、子ども同士をつないでいくことで個を生かす保育が考えられるでしょ

う。  
この先生はとても良心的に子どもにかかわろうとしておられました。状況に応じて柔軟に対応する即興的判断力が発揮されていませんでした。しかし、ほかの先生からアド

バイスを受ければ、考え方を徐々に、より豊かにすることができるといでしょう。そのような学びの場として機能していくことが、園内研修の最大の意義です。

特に園内研修は、それぞれの園が

抱える課題をテーマにできるのが、園外研修にはない大きなメリットです。さらに、保育者の間で意識の共有が進み、皆がひとつの方向を向いて、園内に一体感が生まれるのも素晴らしい効果と言えるでしょう。

## ビデオやデジタルカメラを活用して時間や労力の負担が少ない研修

研修は、決して大がかりである必要はありません。計画に時間をかけ過ぎず、「まずは、やってみよう」と、気負わずに始めてみるとよいでしょう。そして参加者がアイデアを出し合い、次第に研修のかたちを整えていくとよいと思います。

手法としては互いの保育を参観して話し合うのが一般的ですが、皆の時間を調整するのが難しいという園も多いでしょう。その場合は、保育の場面を短時間撮影したビデオを使った研修がおすすめです。

皆でビデオを見ながら、保育担当者が意図を説明し、参加者がよかった点や気になった点を提示し合いま

す。この手法は、特に経験の浅い保育者にとっては学ぶことが多いでしょう。

例えば、昼食の時間、部屋のすみに飾られている花をテーブルに移動し、子どもたちがきれいな花を囲んで食事を楽しむ場面があるとします。中には、花の位置を気にしたことのない保育者もいるでしょう。それが、保育担当者から「子どもたちに花と出合ってもらいたいと考えた」といった意図を説明されると、その後はきっと意識するに違いありません。

もっと手軽な研修を、という園には、デジタルカメラを用いる手法も

あります。ふだんから、皆がデジタルカメラを手元に置き、子どものすてきなと思う表情を写しておくのです。写真を持ち寄って話し合うのもよいですし、少し時間をかけられるのなら、写真で4コマ漫画をつくり、ストーリーを発表し合うのももしろいかもかもしれません。

写真の内容から、それぞれの保育者の視点がわかるのも興味深いところですね。私のかかわっている園では、同じ活動に対する表情が一人ひとり異なるのを表現したかたもあれば、もう少し長期的に子どもの成長がわかるような記録をしたかたもおられました。

## 特別支援に関する研修は他園との合同開催が効果的

特別に支援を必要とする子どもへの対応についても、研修が大きな役割を果たします。特別支援では、保育者によって対応の仕方が異なるのを避ける必要がありますから、園内研修を通して基本的な知識を共有する必要があります。研修には、外部機関から専門家を講師に招いて、考え方を共有・理解することが望ましいでしょう。

さらに、一般論にとどまらず、事例をもとに、支援の内容や保護者と

の連携など、具体的な対応の仕方を確認していきます。ひとつの園では事例に限られる場合があるので、可能であれば、他園と合同で研修を実施するのもよいでしょう。その際にはぜひ、「特別に支援を要する子どもは何か不足しているから指導技術で補う」のではなく、「その子の立場に立ってユニークさを発見して保育に生かす」という視点で話し合っていたらと思います。そのような前向きな話し合いは、園全

体の保育を見つめ直すきっかけにもなるはずです。

研修とは少し違いますが、実践を通して保育の質を高める方法もあります。保育者には、子どもの注意をひきつけるのが得意なかた、子どもに近い気持ちになって一緒に遊ぶのがじょうずなかたなど、さまざまな個性があります。園長や主任が一人ひとりの長所を把握し、「あの先生のここを学ばせてもらいたいね」と皆に伝えておけば、ふだんから意識

して互いの保育を見合うようになるでしょう。一人ひとりの長所を皆で学び合えば、園全体の保育の質は格段に向上します。

日ごろからみなさんが保育日誌を丁寧に書いていれば、研修はいつでも効果的なものになります。多忙ゆ

えに実行できていない園も多いようですが、先ほど述べたデジタルカメラによる記録もひとつの手法ですし、ちょっとしたメモでも、記録するのとしなないとは大違いです。私の知るある保育者は、通勤の電車内で、気になった子どもの様子などを手帳

に書いています。詳しい実践記録とは言えませんが、課題の発見などに大きな効果があるということです。厳しい言い方ですが、忙しいのは誰でも同じです。このかたのように、自分なりの工夫ができる人こそ、伸びていく保育者だと私は思います。

## 適切な「振り返り」により研修の効果が格段に向上

研修では、それぞれの保育者が自分の保育を振り返る必要があります。これが適切に行われなければ、よい点や工夫したい点が明確にならず、取り組みたい課題も見えてきません。

振り返りでは、視点を絞ることがとても大切です。とくに経験年数の少ない保育者は、視点が定まりにくいことが多いですから、この点は園長や主任がしっかりと指導しなくてはなりません。

最低限必要な振り返りの視点として、まずは環境設定に目を向けるといいでしょう。活動に用いた施設や設備、遊びの素材、さらに保育者の居方や声かけなど、広い意味で子どもが受けた刺激が適切であったかを

検討してください。さらに、子どもの言動に対して、保育者がどの程度の敏感さで、どのように応答したかという視点も大切です。そして、子どもが主体性を発揮する余地を十分に与えたかどうかを忘れずに振り返りましょう。

振り返りの際は、マイナス面ばかりを探さないように気をつけてください。日本は反省の文化が強いため、この傾向がありますが、それでは保育者がつらい気持ちになるだけです。園内の雰囲気をよくするためにも、研修を長続きさせるためにも、まずはよい点から話し始めましょう。

特に、中堅やベテランは、若手に比べて自己評価が辛口になりがちで

す。きっと、自分なりの課題が明確に見えているからでしょう。それはそれで立派なことだと思いますし、逆に若手が保育を楽しみ、ある程度の満足感とともに振り返るのも悪いことではありません。大切なのは、どちらが正しいという考え方をせず、互いがどのような視点で自分の保育を振り返っているのかを理解し合うことではないでしょうか。若い保育者に対して、「もっと厳しく振り返りなさい」と指導するよりも、ベテランの自己評価を見せることにより、「そういう視点も大切だな」と、自ら気づかせる方が深い学びになるケースが多いと思います。

互いの保育への感想や意見を述べ合う際にも、同様の意識が大切です。

表1

保育実践上、運営上の課題

	幼稚園(国公立)	幼稚園(私立)	保育所(公営)	保育所(私営)
1位	教員の質の維持、向上 39.9%	教員の質の維持、向上 36.9%	保育士等の質の維持、向上 44.2%	保育士等の質の維持、向上 51.7%
2位	幼稚園教育の重要性の周知 36.2%	新たな園児の獲得 36.6%	保育士等の確保 42.4%	予算(補助金、保育料など)の確保 44.6%
3位	教員の確保 33.9%	予算(補助金、保育料など)の確保 35.9%	施設・設備の充実 42.3%	保育内容・方法の充実 40.0%

※「とてもあてはまる」の割合。幼稚園と保育所の調査で重なる項目の中で、それぞれ数値の高い上位3項目を掲載。  
※「第1回幼児教育・保育についての基本調査」(調査概要は、ベネッセ次世代育成研究所ホームページを参照)より



「あのとき、こんな声かけをしていれば——」などと、至らぬ点ばかりが議題に上れば、指摘された側は壁をつくり、自己弁護に終始してしまうかもしれません。まずは、「○○ちゃんの表情がよかったね」などと、よかった点を見つけましょう。その際には、保育者の人柄ではなく、子どもの姿や活動内容に結びつけて評価すると話し合いが深まりやすいで

す。  
若い保育者には若いなりの、ベテランにはベテランなりのよさがあるものです。ふだんから、お互いに認め合っているという安心感や信頼感があれば、よい点を指摘し合う中で、「いつも、こうではないのよ」「じつはこういうことに困っている」と、自然に課題が出てくるものです。さらに、プラス面を中心に話し合っ

ると、「ほかの子にも、こういう表情をさせたいね」などと、次第に園としての方向性も明確になっていくでしょう。  
むろん、中には具体的に指導する必要のある保育者もいるはずですが。その場合は、園長や主任などの指導的な立場のかたが、パーソナルな関係の中で助言するとよいと思います。

## 園長が「哲学」をもつことで研修の目的意識が明確に

研修の効果は、園長のリーダーシップにも大きく左右されます。ヨーロッパでは園組織の質向上やリーダーシップに関する研究が盛んですが（表2参照）、日本ではあまり検討されていないのが現状です。

リーダーは、明確な哲学をもつことが何より重要です。といっても難しいものではなく、ここでは園としての方向性や保育のビジョンなどをイメージしてください。これは「仲良く、楽しく、のびのびと」といった漠然としたものではなく、子どもの姿をはじめとした具体的な事例を通して、目に見えるかたちで語られ

なくてはなりません。この哲学を園内に浸透させることにより、研修の目的意識もいっそう高まるでしょう。もちろん、園長には経営者的な視点も大切ですが、それ以上に、誰よりも子どもの実態を把握し、全体的な視点から保育の舵取りをする能力が求められるのです。

園長がすべてのリーダーシップを掌握するのではなく、効果的に分散させることも大切です。分掌が増えすぎるのは問題ですが、ある程度、責任を分散させることにより、担当者の意識が高まる効果も期待できるでしょう。

子どもの笑顔は、保育者の笑顔があつてこそ、引き出せるものです。皆が自分の課題を発見するきっかけになると同時に、「明日から、もっと頑張ってみよう」と、保育者を元気づけることのできる研修を目指していただきたいと思います。

### 現場のみなさんへ

◎幼児教育の要は、遊びだと考えています。子どもが豊かな遊びとともに生活できるように、十分に配慮しているか。子どもと一緒に遊んで、遊びを指導しているつもりになっているだけで、実は子どもは心の底から遊んでいないのではないか。そのような自問を大切にしながら、自身の専門性に誇りをもち、子どもの素敵な笑顔を引き出していただきたいと願っています。

表2 高い質の園10の特徴

- 1 園全体としてのビジョンが明確に表現できている
- 2 職員間で理解、意味、目標(課題)を共有できている
- 3 職員間の効果的なコミュニケーションの工夫ができています
- 4 保育者の省察を推奨している
- 5 実践をモニタリングし評価し合える
- 6 専門的な資質向上に関与できる
- 7 リーダーシップが分かちもたれている
- 8 学び合う風土や文化ができています
- 9 親や地域とのパートナーシップがとれている
- 10 リードと調和のバランスがとれている

出典◎英国(Blatchford & Manni, 2007)

## 園内研修に関するQ&A

# ポイントを押さえて研修をより効果的に

研修の必要性を感じながらも、「何から始めればよいかわからない」「十分な時間がとれない」といった理由で園内研修の実施に課題を抱えている園も少なくないようです。そのような園に多く見られる悩みや疑問に、玉川大学の大豆生田啓友先生が答えます。

玉川大学教育学部准教授  
大豆生田啓友

おおまめうだ・ひろとも  
専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。  
著書に、「これでスッキリ! 子育ての悩み解決100のメッセージ」(すばる舎)、  
「よくわかる子育て支援・家族援助論」(ミネルヴァ書房)など。



**Q1** 園内研修と言ってもこれまで行ったことがなく、何から始めたらいいのか、よくわかりません。

**A1** 保育中の印象的な場面を話し合ったり、記録したりすることから始めましょう。

保育の中で困っていること、悩んでいること、気になる子どもの話などをもち寄って話し合うといいでしょう。保育の印象的な場面を記録して(エピソード記述)、共有することから始めてもいいと思います。みんなで印象的な場面の写真もち

寄ってもいいですね。それぞれがエピソードを発表し意見を述べ合うことで、情報や保育観の共有を図ります。例えば、ある保育者が、少し配慮を要する子どものエピソードを発表し、皆で解決方法を話し合うとしましょう。このケースでは、子どもについての情報が共有されるとともに、いろいろなアイデアが提示されることにより子どもの見方が広がる効果を期待できます。エピソードの内容は実際に起こったことですから、自身の保育観などを発表する研修よりもハードルが低く、皆が発言しやすいのも利点と言えます。

**Q2** 研修を始めるにあたり、職員同士が心がけるべきことはなんですか。

**A2** 互いに批判しない、自分の見方に固執しない。この2つが大切です。

園内での話し合いに慣れていない段階では、互いを批判しないことをルールにしてください。経験の浅い保育者の意見には指摘したくなる点が多いかもしれませんが、まずは「自分が見たことや感じたことを自由に話してもよい」という風土をつくるのが先決です。園長や主任など、研

修をファシリテート（進行・促進）するかたがたは、特に留意してください。

どの保育者も前向きな姿勢で取り組み、子どもたちもいきいきとしていられる園では、必ずと言っていいほど、保育者同士の本音の「語り合い」を大切にしています。保育者としての質を高めるには、自分の見方だけに固執せず、ほかの保育者の語りに耳を傾けて新しい見方をどんどん取り入れていく必要があるのです。そのような風土が根づいて、信頼関係が十分に構築されたら、少し突っ込んだ意見を述べ合っても大丈夫でしょう。

**Q3** 研修のための時間が十分にとれません。短時間で実施できる方法がありますか。

**A3** 1日10分からでも始めてみましょう。

研修を実施する時間がないという園は多く、とりわけ保育所では大きな悩みの種になっています。それでも、時間をじょうずに使って実施している園も少なくありません。

ある園では、情報共有の不足を解消するために、保育者が自発的に毎日の10分間ミーティングを始めました。タイムリミットを明確にすることで、話し合いの焦点が絞れて密度の濃い時間になっているようです。別の園では、保育者が午睡の時

間に集まり、子どもたちの姿や課題について語り合っています。その時間帯は、非常勤のかたを特別に配置しているそうです。また、園内研修等の時間短縮のため、事例提供者は研修の1週間前に事例を文書にして配り、参加する先生はそれを読んで自分の意見をまとめてから話し合いに臨むという方法をとっている園もあります。

**Q4** 研修は、基本的に若手が対象と考えてよいでしょうか。ベテランは指導に回るべきですか。

**A4** ベテランにも当然自分を振り返り、省察することは必要です。自分の中に新たな課題が見つかるでしょう。

保育者としての専門性を高めるには、絶えず自らを振り返る必要があ

ります。それが、現場を通して常に成長を続ける「反省的实践家」としての態度だと思います。

確かに、子どもの見取りや保育技術は、経験を積むほど熟達するでしょう。しかし、それゆえに自己を絶対化してしまいがちなのが、ベテランの最大の課題です。「こうあるべきだ」といった思い込みが強すぎると、子どもと一緒に発見し、驚き、喜ぶことのできるフレッシュな気持ちも薄れていくかもしれません。そのような状態では、質の高い保育の提供は難しいと言わざるを得ません。

そこで、常に保育を振り返り、ほかの保育者と語り合う作業を通して、自分の中に発見した課題に取り組み続けていく必要があるでしょう。魅力的な経験者は、子どもの姿から、そして若い保育者、保護者や地域の人などからも、謙虚に学ぼうとします。



保育上の気づきを自由に述べ合うことで、若手やベテランがお互いに学び合うことができます。(写真/新宿区立戸塚第二幼稚園)



**Q5** チェックリストを用いて振り返りを行っています。この方法で問題ないでしょうか。

**A5** ふだんの保育の振り返りとチェックリストをうまく併用しましょう。

チェックリストは全体的な視野から自分の保育や子どもの姿を振り返るうえで有効です。特に、見落としていたことを発見するのに役立ちます。しかし、ただリストでチェックをただけでは、自己評価をしたつもりになるだけで、十分な意味をもちえません。その先が重要なのです。例えば、「子どもが主体的に遊ぶよう環境構成を行った」というチェック項目があったとします。それに「できていた」と答えた場合、自分は具体的にどのような環境構成の工夫を行ったのか、それはどのよ

うな課題意識があったからで、そこからどのような具体的な子どもの姿が見えてきたかをエピソードであらわしてみることが大切です。また、「できていない」と答えた場合は今後どのように環境構成を工夫していくかを具体的に書き出してみましよう。そうすることで、自己評価が保育の見直しに生かされるのです。また、チェックリストには「できたか」「できないか」だけで物事を判断してしまう危険性もあります。特に個々の子どもの姿を評価するときなど、子どもの姿をそうした結果のみで見る保育になってしまうことはとても問題です。評価はプロセスが大事です。個々の子どもの思いやその子なりの変化のプロセスを見ていくようにしなければいけません。だから、特に個々の子どもの姿を評価する場合は、エピソードで記述することが大切で、日常的な保育の振り返りの記録が保育のもっとも重要な評価になるのです。

**Q6** 保護者との確かな協力関係を築いていくために、研修を活用する方法はありますか。

**A6** 保育のねらい、思いを明確に伝えることで、取り組みへの理解が得られます。

毎日、子どもの姿を何枚か写真に撮って、そこにちょっとしたエピソードやそこで経験したことを1枚にまとめて保育室の前にはりだしている園があります。午睡の時間を利用し、20分ほどで作成しています。この写真を保育記録として保存して研修に活用するほか、保護者に向けて掲示しています。ある保育者は、子どもがいろんなにおいを発見してそこから活動がさまざまな発展していく事例を長期に記録し、保護者にも発信してきました。すると、写真を通じて経過を見ていた保護者から、

インタビュー

# 若手の保育者がのびのびと育つ 温かい園の風土を根づかせるには

若い保育者の育成は、園の共通の課題となっています。希望や目標をもって保育の道を選んだ若い世代の向上心を支え、成長を促していくには、どのような園の環境が望まれるのでしょうか。聖心女子大学の河邊貴子先生にお話をうかがいました。

## 揺るぎない理念に基づく、風通しのよい人間関係を

### 若手のよさを認めて 向上心を引き出せる風土を

近年、若い保育者の離職率の高さが、多くの園の課題となっています。保育者という職業は、子どもの頃から憧れて就く人が多いものですが、どうしてすぐに辞めてしまうのでしょうか。

若手の退職理由として多いのが、職場の人間関係の悩みや体力的な問題です。しかし、若手ならではのこうした悩みは、今も昔も大きく変わりません。そう考えると、園側の変化にも目を向ける必要があるでしょう。

最近、新人がミスをしないうように、事前に本人が考える余地のないほど細かく指導する園が増えているようです。背景には、昔に比べて園に対する保護者の要求が強まっていることもあるのでしょうか。しかし、自分で考える余地を残しておかないと、次第に試行錯誤をやめて成長が止まりますし、目的を見失って心が疲れてしまいます。

細かく指導したくなる気持ちは理解できますが、若手ならではの一生懸命さや元気が園の雰囲気によい影響をもたらしていることを見逃してはいけません。そのようなよさを認めつつ、本人が自分から



河邊貴子

かわべ・たかこ  
聖心女子大学文学部教授。東京都公立幼稚園で12年間教諭として幼児教育に携わった経験をもつ。2008

年改訂の幼稚園教育要領解説作成協力者、中央教育審議会専門委員(初等中等教育分科会)などを歴任。著書に『子どもごころ—幼児が生きている豊かな時間』(春秋社)など。

「変わりたい」「伸びたい」という気持ちになるような温かい「風土」をつくるのが何より重要でしょう。

### 子どもを軸とした理念の共有で コミュニケーションを活性化

風土とは、土(地面)があり、そこに風がそよいでいるイメージの言葉だと思います。園にとっての「土」は保育の理念、「風」は人間関係の風通しと言えるでしょう。

園長が発信する理念が揺るぎないものとして共有されていれば、保育者の間に同じ方向を向いて力を合わせようという感情的なまとまりが生まれます。理念を改めて説明

活動のアイデアがたくさん寄せられ、保護者を巻き込んだすばらしい保育になりました。

エピソード記述を活用した保護者への説明にも説得力があります。保護者は入園後、すぐにわが子に友だちができると考えますが、必ずしも、そうならないのはみなさんがご存じの通りです。環境に適応しにくいタイプの3歳児の保護者に対し、ある保育者は「徐々に友だちを意識しつつあるけれど、まだひとりで砂場で遊んでいる段階なので、もう少しこのまま見守りたい。チャンスがあれば、ほかの子とつなぐ指導もしたい」と、エピソードを交え成長のストーリーを説明したところ、非常に感激されたという話を聞きました。砂場で遊ぶという行為にも深い意味があり、保育者がプロとして見守っていることを実感をもって理解してくれたのでしょうか。



全員で教育課程を見直し、保育で大切にすべきことを共有化していきます。(写真/静岡豊田幼稚園)

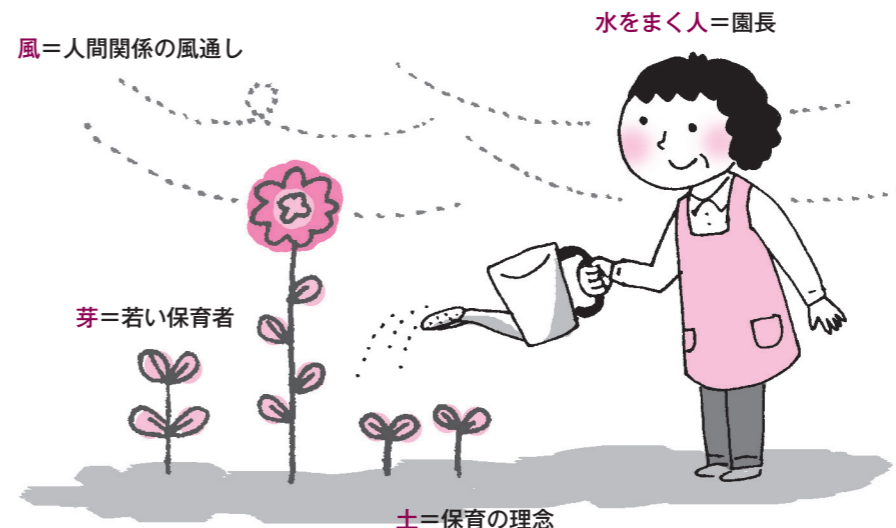
保育のねらいは、保護者にはなかなか伝わりにくいものです。「ただ遊んでいるだけ」と見られてしまうことも多いでしょう。こちらが説明しない限り、保護者は「できばえ」を求めます。例えば、子どもたちがアイデアを出し合って劇をつくる場合、活動のプロセス自体が意味をもちますから、衣装やストーリーに多少の不備があってもかまわないと、保育者は考えるでしょう。しかし、そのねらいをきちんと伝えなければ、保護者は立派な劇でないこと

に不満を抱いてしまいます。保護者の思いを受け止めたうえで、「今はこういう時期だから、こうしている」と、子どものエピソードにもとづいた説明をすれば、きっと保護者は理解を示します。決して容易なことではありませんが、研修を通して保護者対応に関する意識を共有することが、保護者との協力関係を築く第一歩となるでしょう。

### 現場のみなさんへ

◎保育の仕事は、社会からまだ十分に評価されていないと感じます。遊びと教育のつながりがわかりづらいことが、そのひとつの要因でしょう。しかし、外からは理解されにくいものの、みなさんが非常に重要な仕事をしていることに変わりはありません。園内研修は時間や労力を要するため大変ですが、自分を高めるとともに、幼児教育について保護者などに発信する材料をつくる場にもなります。今後はますます、園の情報を公表する機会が増えていくでしょう。その流れをチャンスととらえ、研修をじょうずに活用しながら、幼児教育への理解を深められるように社会に対して働きかけていきましょう。

※2009年秋号掲載



する機会は少ないものですが、行事などでねらいを強調して伝えたり、園長等が保育をする姿を見せたりして、繰り返し感じ取ってもらえるように努めてください。理念が共有されていないければ、どれだけ人間関係がよくても、それは「仲良しグループ」に過ぎません。若い保育者も理念を十分に理解すれば、先輩の保育のねらいを察したり、厳しい指導を受けても納得して耳を傾けたりするようになるはずです。

保育の理念は、「すべては子どものために」といった子どもを見つめたものであるべきだと、私は思います。こうした理念が十分に浸透すれば、園内に子どもを軸としたコミュニケーションが生まれやすくなるでしょう。職員室で自然と子どもの話が始まるような雰囲気が理想的ですが、なかなかそうならないときは、園長のちょっとしたサポートが必要です。

園長が子どもの名前を出して印象的だった保育の場面について話したり、がんばっている保育者の話を聞いたりすれば、保育者間の会話のきっかけになるでしょう。共同作業の場を設けるのもよい方法です。以前、私が勤めていた園では、子どもが帰った後、同じ年齢を担当する保育者が集まって保育室を掃除しました。3クラスの場合は、3人が一緒に3部屋を掃除して回るのです。すると、「このあたりで遊んでいた子どもたちが楽しそうだった」「この掲示物はおもしろい」などと、子どもや保育の話が自然と出てきます。面と向かって話すときに比べ、作業をしていると気軽

に話せますし、そういうときのほうが、構えていない分、指導を素直に受け止められるものです。共同作業は、草むしりや花壇整備、教材室の整理など何でもよいと思います。

### 若手の成長レベルを捉えて視点を広げるアドバイスを

若手の保育者の指導時には、本人が直面する課題を意識してあげてください。誰でも最初は目の前の子どもの対応でいっぱいですが、経験を積むうちにまわりの子どもが見え始めます。「木」から「林」に目が向くようになったわけです。さらに成長すると林と林の関係に気を配れるようになり、やがて「森」、すなわちクラス全体を視野に入れて保育ができるようになります。若い保育者に初めからきっちり「森」を見るように求めても難しいです。その保育者は何が見えており、何ができないレベルかを園長が把握していれば、「その子どものまわりはどうなっているかをよく見てごらんください」と、視点を広げるアドバイスができます。

誰でも経験の浅いうちは不安を抱え、自信がないものです。小さなことでもほめて認めれば、大きな支えになるでしょう。落ち込んでいるときには、子どもの良さや保育の楽しさなどを思い出し、原点に帰るよう促すとよいと思います。

そして、先輩が向上心を抱いていることも、若手が伸びる条件です。みんなが学び合って伸びようとする、そんな温かい風土のある園を目指していただきたいと思います。

### 保育者から見た園の風土体験談

#### 園長の保育観がわかり保育者が一つにまとまった

◎園長が保育観をしっかりと伝えている園は、保育者が一つになり、また自分の成長も感じることができます。私も若手のころ、園長が「一人ひとりが自信のあるものを発揮し、足りない部分は互いに補い合えばいい」と話してくださったことで、ほっとしましたし、みんなと協力しようという気持ちが強くなりました。(公立保育園・25年目)



#### 「園長が守ってくれる」安心感の中で私は育ちました

◎新任の時、園長から「思うとおりにはやってみなさい。責任は私がとるから」といっていただきました。その言葉のおかげで主体性が生まれ、失敗や成功がその後の糧になった気がします。また、悩みをじっくりと聞いてくださり、「一緒に考えてみましょう」と時間を惜しまず話合ってくれた先輩方にも育てられました。(国立幼稚園・23年目)



※2011年夏号掲載

本誌は無料です

## ベネッセ次世代育成研究所の発刊物は、ご希望に合わせて園へお届けします

※ただし、複数冊をご希望の場合は、岡山県からの宅配料がかかる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

お手続き方

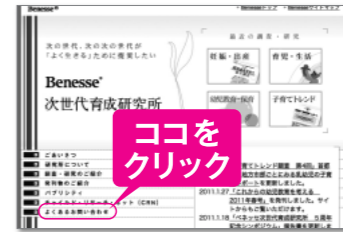
ベネッセ次世代育成研究所ホームページ、もしくは、電話でお申し込みください。通常はお手続き完了から**1週間～10日程度**でお届けします。

### ホームページ

インターネットで検索してください。▶▶▶

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

◎乳幼児の子育てに関する調査や、幼稚園長・保育所長を対象とした調査の報告書など、ベネッセ次世代育成研究所の発刊物のお申し込みと閲覧(PDFファイルのダウンロード)が可能です。お急ぎの場合は、インターネットのご利用が便利です。



お問い合わせの際、**必ず、下記の内容をお知らせいただきますようお願いいたします。**

- ①お届け先の住所・所属・お名前
- ②お届け先の電話番号
- ③ご希望の冊子名(例：冊子名や発行年、季刊号をお知らせください)
- ④ご希望の冊数
- ⑤冊子を知ったきっかけ
- ⑥ご希望の理由(活用方法など)

**注意事項** ・ご記入いただいた内容に不備がある場合は、送付することができませんのでご了承ください。  
・在庫数には限りがあるため、送付をいたしかねる場合、または、送付までにお時間をいただく場合があります。

他の園にもぜひご紹介ください!  
『これからの幼児教育』の定期的な発送をうけたまわります。

◎お知り合いの園で『これからの幼児教育』が届いていない園がありましたら、ホームページが電話で上記の内容をお知らせください。定期的な発送をいたします。  
※なお、定期的な発送は1園につき、1冊とさせていただきます。個人宅にはお送りできませんのでご了承ください。

## 発刊物のご紹介

### これからの幼児教育

- ◎主な記事の内容
- 2012年春号 **子どもの力を引き出す園での信頼関係**
- 2011年秋号 **のめり込める遊びで幼児の心と体は育つ**
- 夏号 **情報発信で保護者と「つながる」園をつくる**
- 春号 **園の遊びがもたらす幼児期の学びの芽生え**
- 2010年秋号 **特別なニーズをもつ子に寄り添う保育**
- 夏号 **家庭と連携した食育活動のあり方\***
- 春号 **保護者の成長を促す園の支援\***
- 2009年秋号 **保育者の資質を高める園内研修**
- 夏号 **幼保一体化と新しい幼児教育**
- 春号 **幼小連携に向けて現場が取り組むべきこと**
- 2008年秋号 **幼稚園教育要領改訂を日々の保育にどう生かす?**
- 夏号 **幼稚園教育要領改訂のポイント**

※在庫切れのため、ホームページからダウンロードしてください。

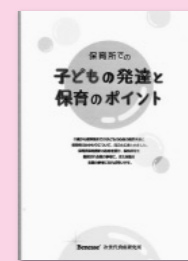
### ◎その他、幼児教育・保育に関する発刊物



第1回 **幼児教育・保育についての基本調査報告書**  
(幼稚園編・保育所編)  
◎全国の幼稚園・保育所を対象に、幼児教育・保育の実情と課題を調査から明らかにしました。  
B5判 160ページ



**幼児の遊びにみられる学びの芽**  
◎4～5歳児の遊びの事例を59サンプル収集し、遊びに含まれる学びの可能性や保育者のかかわりを分析しました。  
A4判 72ページ



**保育所での子どもの発達と保育のポイント**  
◎0歳から就学前までの子どもの成長発達と保育者のかかわりや、幼児の言動の意味と援助のポイントをまとめました。  
A4判 112ページ

※在庫数に限りがあるため、ご希望の冊数をお届けできない場合があります。ご了承ください。